琉球大学学術リポジトリ

# 第10回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集



| メタデータ | 言語:<br>出版者: 琉球大学<br>公開日: 2017-03-23<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 琉球大学附属図書館編<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/36465 |

第10回

# びぶりお文学賞

2016

受賞作品集

## 赤いまま

竹澤さち

## アニマルテーゼ

元澤一樹

琉球大学

第10回

# びぶりお文学賞

2016

受賞作品集

## 赤いまま

竹澤さち

## アニマルテーゼ

元澤一樹

琉球大学

# 第十回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

# 第十回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集　目次


小説部門受賞作

**赤いまま**　**竹澤　さち**　6

（琉球大学・人文社会科学研究科博士前期課程二年）

小説部門佳作

密輸事件簿・・・密輸犯を絞り込め　沼田　健次郎　40

（沖縄大学・現代沖縄研究科修士二年）

詩部門受賞作

**アニマルテーゼ**　**元澤　一樹**　78

（沖縄国際大学・総合文化学部・日本文化学科二年）

詩部門佳作

夏の色　仲間　陽香　82

（沖縄工業高等専門学校・メディア情報工学科四年）

夜間非行　清水　元貴　86
（琉球大学・理工学研究科博士前期課程一年）
虚実面境　島袋　歩　90
（沖縄工業高等専門学校・情報通信システム工学科四年）
ドリームマップ　杉下　薫　94
（琉球大学・法文学部・総合社会システム学科一年）
窒息者のうた　長嶺　勝磨　98
（沖縄県立芸術大学・美術工芸学部・美術学科三年）
選評小説部門　106
選評詩部門　119
選考経過　126

琉球大学びぶりお文学賞は、琉球大学が基本目標として掲げる「地域及び広く社会に貢献する人材」「意欲と自己表現力を有する人材」育成の一環として、言語力（読む力、書く力）を向上させ、想像力、表現力、創造力豊かな学生を育成するとともに、文学の啓蒙活動を高め、地域社会における文学・文化活動のリーダーを輩出することを目的に琉球大学に在学する学生を対象に平成十九年度に設けられました。第七回（平成二十五年度）から、応募資格が沖縄県内の大学生（高等専門学校の場合は本科四年次以上）及び大学院生に拡大されました。

装丁　上村　豊

# 小説部門

小説部門受賞作

# 赤いまま

竹澤　さち

祖母が亡くなって、二年が経つ。

＊

大学四年の夏季休暇、進学資金を貯金するための新しいアルバイトを三つ始めたが、そのうちの一つに悩まされていた。それまで、塾講師くらいしか経験したことのなかった私にとって、接客業という業種に応募したこと自体が不思議なもので、応募した理由も思い出せない。特に期待もなく、求人誌にあった情報で目に付いただけ、本当にただそれだけだった。

当然、志願理由などあるはずもなく、採用担当者を困らせた挙句、「笑うことが苦手そうな顔ですね。接客でそれは許されません」と言わしめた私は、とりあえず面接を受けたという事実だけを欲し、どうせならそのまま不採用にでもしてくれと、心の底から願っている始末であった。

しかし、数日後には件の職場から採用の連絡があり、週末からはそこで働くこととなった。そして初出勤の日、仕事を全く覚えられない私は、仕事の遅さや表情のかたさを指摘される度、人並みのことが出来ない自分を責め立てた。休憩時間の度に倉庫へ逃げ込み、行き場のない気持ちに形を与えるように、自分の腕をかきむしった。

その日の夜は食事が喉を通らず、布団に入っても二〇分おきには目が覚め、トイレで吐いてしまうような状態になっていた。三日後には症状が悪化し、腹部に痒みをともなう湿疹が出始めていた。この痒みのせいで不眠は決定的なものとなり、一週間ほど微熱や腹痛、安定しない呼吸などの不調に悩まされた。

幸か不幸か、夏季休暇中は職場以外で人と会う予定もなく、誰にも心配をかけることはなかった。それはつまり、誰にも相談出来ず、身体に折り重ねられていく痛みを、この身体のうちに留めておかざるをえないことを意味していた。

正直、仕事の内容は大したことのないものであった。辞めようと決めたのは、責任者が私を叱責する際につかう言葉の節々によって心を抉られる苦痛に悩まされる日々が続いたことが、一番の理由だった。

私の不出来を責められているのは分かっていたのだが、何故か私の出自と絡めながら言い放たれる言葉の数々に、全身を切り刻まれるかのような恐怖を感じていた。私の身体や、履歴書に書いた経歴、家族構成などを述べ連ねられ、何度も「ナイチャーの親から生まれたお前が、何故ナ

イチャーらしいことも出来ないのか」と責められた。私には、「ナイチャー」であること、あるいは「ナイチャー」ではないことの何が問題なのかを理解することが出来なかったし、それを言われることで、私に何が求められているのかも余計分からなくなっていた。

時々、「沖縄は偏っているからね」「汚い顔でもちゃんと笑え」と漏らした責任者の言葉が、私の半身を圧し潰すような重さでにじり寄ってきて、そこにいるだけで、心と身体が痛み、帰る頃にはほとんど何も考えられなくなっていた。

職場での私は「ナイチャー」と呼ばれても、ろくに「ナイチャー」でいることすら出来ず、「ナイチャー」ではないことの方を殊更強調される始末であり、その言葉の前では私のあらゆる思考が停止した。私自身を点検することは、この苦痛を増幅するだけのものであった。

ただひとつ確信していたのは、私は明らかに、この職場にとって場違いな存在なのだということであった。

翌週、辞める旨を伝えるために、職場へと向かったが、家を出る時点で、既に内臓がひきつり、視界も白けはじめていた。約束の時間に遅れてしまった私を待っていたのは、責任者からの、退職にかかわる法律と損害賠償請求の説明であった。半年以上の勤務を前提にした契約の違反、今後の損害、制服代、他店からのヘルプ等の店側の負担を試算した数字が目の前に出された。それらをもとに、今すぐ辞めることが私にとっても不利益であると続けながら、冷静に考えるための時間として、明日を休日にするという妥協案と、明後日の出勤を提示された。

とはいえ、職場に足を踏み入れるだけでも眩暈を起こす状態の私にとって、そもそも一日考え

ること自体が恐怖であり、苦痛を先延ばしにすることが辛かったため、うやむやな返事のままに軽く礼をして職場を立ち去った。

＊

その翌日のことである。

――福岡に行くから準備をしなさい。

昨日のことを忘れるため、飲むほど酒を浴びたせいで二日酔いだった私に、父親から朝一番にかけられた言葉がそれであった。直後、「祖母に会いに行く」と言われ、ようやく事態を飲み込めるようになった。

三〇分後には家を出ると言われていたため、キャリーケースを準備する時間もなく、リュックサックに二泊三日分の着替えやアメニティと、卒業論文の参考文献数冊を詰めた。その後、母親の運転で国道五十八号線を通り、那覇空港へと向かった。あまりにも身軽だったので、父親と私は空港到着後すぐに保安検査場を通過し、搭乗ゲート内で適当な沖縄土産の購入を済ませ、午前一〇時を過ぎる頃には既に飛行機に搭乗していた。

何故、福岡なのか。

数年前、それまで神奈川県横浜に在住していた祖父母が高齢になったこともあり、伯父の住ん

でいる福岡に引っ越すことになった。奇しくも、二〇一一年の東日本大震災が起こる前に転居が終わっていたために、この転居について父親は「運が良かった」などとも言っていた。

私にとっての福岡とは、祖父母が引っ越す前、中学二年の修学旅行で行ったきりの場所であった。以前から伯父家族が住んでいることは知っていたが、家族で交流があるわけでもなく、少なくとも身近に感じられるような土地ではなかった。二学期制が導入されていた中学に進んでいた私は、中学二年の秋休みに神奈川へ帰省した際に、横浜の中華街で祖父母と伯父に会ったのだが、そのたった一回が伯父との対面であった。たまたま、その翌月が修学旅行だったこともあり、多少は意識したくらいで、だからと言って会いたいなんて考えもしなかった。

それほど希薄な伯父や祖父母との関係において、私が何故、今、祖母に会いに行かなければならないのかと自問せずにはいられず、困惑と焦燥とがないまぜになって、気持ちの整理がつかないままではあったが、それでも飛行機は福岡へと向かっていた。

祖父母や伯父は、私のことを覚えているのだろうか。

＊

横浜にあった祖父母の家には、小学三年の頃と、中学二年の頃と、二度行ったことがあった。一度目の帰省の前に、両親から父親の実家は相当大きな家だったと聞いていた。庭には蜜柑などの果物の樹があり、十万円のバイク、六万円のエレキギター、二十五万のオーディオ、そし

て自動車二台を買い与えられて育ったという父の金銭感覚に驚くことが多かったので、祖父母がどのような家に暮らしているのか、小さな私は、幼心ながらに気になってはいた。もちろん、それは父親が沖縄に移住する前の話なので、三〇年以上も前のことである。全く同じ家ではないだろうと理解はしていたが、それでもどこか浮世離れしたものであることを期待していたのである。

しかし、羽田空港から水色の京浜東北線まで乗り継ぎ、最寄り駅に着いた私たちを迎えに来てくれた祖父は、どこにでもいる老齢の腰の曲がった祖父だった。

祖母が待っているとのことで、家まで行くと、小さなアパートの一階の角部屋に案内された。老夫婦が身を寄せ合って暮らしているだけの、侘しさの感じられる部屋だった。そこでようやく初めて顔を確認できた祖母もまた、どこにでもいそうな普通の祖母であった。多少の驚きはあったが、しかし、それは決して落胆ではなく、普通であることに安堵したという気持ちの方が大きいものでもあった。

その時分、祖父の心臓バイパス手術が終わり、余生にはせめて孫の顔を見せたいと、父親なりの親孝行として、兄と私とを連れて帰省したのだった。太ももから股間を通っている大きな血管を心臓の方に移植するという大掛かりな手術は無事成功しており、術後の経過も安定していた。祖父は、記念になればと、ズボンを脱ぎ、下着一枚になってその傷痕を見せてくれたこともある。また、工場で働いていた頃に怪我をした指で、私たちとトランプやオセロに興じる様子は、普段同級生たちが言っていた「おじいちゃん」そのものであり、妙なこそばゆさを感じた。

その時から、祖母の性格について聞かされることがあった。祖母は、洗剤や石鹸、ポケットティッ

シュ、ビニール袋といったものを大量に集めて保管している人だったのである。また、孫である私たちをもてなすために、何をしたらいいか分からなかったのだろう、五人が肩を寄せ合っていた食卓には、明らかに作りすぎた料理の数々が並べられていた。祖母が作る料理は全てが美味しかった。しかし、小学生の私が好むような品はなく、そこに並べてあったのは自家製の漬物や和え物といった渋いものが多かったところに、祖母らしさを垣間見た気がする。

また、絵に描いたようなせっかちであった祖母は、非常に早口であった。人一倍人見知りで、親類であっても上手く話せない私のことを気遣うかのように、私の言葉を先取りして話し続ける祖母にやや圧倒されてもいた。

祖母との思い出の中で、何故そのような話題になったのか、経緯を思い出せないが、しかし、私がお風呂から上がった時、「やっぱり沖縄の子だから可愛いね」と言っていたことだけは、あまりにもはっきりとした輪郭と緊張感を伴って思い出される。その時のお風呂の匂い、肌を伝う湯上りの汗、私の服の布地の厚さについて話している祖母の声など、その一瞬だけは常に生々しく想起された。それは孫への愛情にあふれる優しい声だったはずだが、同時に、祖母からの視線を注がれる私の身体は、紛れもない「沖縄の子」なのだという事実を突きつけるには十分すぎるほど、冷ややかなものにも感じられた。

それ以外であれば、滞在中は毎朝祖母と二人でアパートの塀をまたぎ、コンビニへ買い物に行ったのも何気ない日常の一コマであった。

ただ、私は、祖父母と一緒にいたごく短い幼少の記憶を、それが綺麗なものであると納得した

うえで思い出すように癖付けをしていた。

機内で仮眠をとりながら、不器用で心配性の祖母との記憶を思い出してみたものの、これより前そして後の思い出がない。中学二年の訪問では、祖父母の部屋ではなく、山下公園近くのホテルに泊まっていたこともあり、共に過ごした時間と呼べるものは、ほとんどなかった。

それ以外の接点といえば、毎年元日に父親が新年の挨拶だといって、祖父母と電話をするのが恒例だったが、思春期以降は、電話越しに祖父母がいることの事実確認的な儀礼になっていた。私にとっては祖父母含め、親類と疎遠であることが普通であったために、親類と何かを言葉を交わすこと自体が気恥ずかしく、また、とりたてて意味も感じられなかったのである。唯一、母親がそのような親類関係に気を配っていたが、それもあくまで沖縄県内にいる母方の親類にとどまり、横浜の祖父母、ましてや福岡にいた伯父家族と連絡を取りはしても、何か直接的な交流があったとは言えなかった。

そのような中で、急に祖母に会いに行くと言われても、どこかで躊躇していたというのが本音である。今更どのような顔をして会えばいいのかが全く分からなかったのだ。

＊

正午前、高度を下げて着陸態勢に入った飛行機から見えたのは、空港の前にある看板と、そこ

に埋め込まれている電子時計であった。それは中学二年の修学旅行の際に見かけたもので、見知っている土地であることを私に確認させた。着陸の大きな振動の後、そそくさと飛行機を降り、手荷物受取所と到着ゲートを抜け、先ほど見つけた看板の前からタクシーに乗り込んだ。

九月の平均気温でいえば沖縄と然程変わらない福岡の陽射しは、車内の私の体に汗をにじませるには十分な熱量を持っていたが、集合住宅の名を冠した土地にある病院に着いた昼過ぎにはだいぶ和らいでいた。日の傾き方ひとつとっても、ここは沖縄ではなかった。

病院付近には、区画整備と修繕工事をおこなっている団地や小学校が多く、金属とアスファルトとがぶつかる硬質な低音が響き渡っていた。その中でも高台に位置していた病院は、この再開発の時期に新築されたように感じられる清潔感をたたえていた。

土曜は休診らしく、正面玄関の案内に従い、私たちは休日用の出入口から院内に足を踏み入れた。スニーカーの小さな足音ですら院内を満たす静寂と、消毒液の匂いが染みついたエントランスを過ぎ、自動販売機横のエレベーターに乗り込み、祖母の病室のある三階へと向かった。

祖母の病室に入って、最初に目に入ってきたのは、仕事を早退してきた作業着姿の伯父であった。ベッドのそばに立ち、父親と私を待っていたと言う。伯父の強い癖毛は、伯父と父親とを兄弟であると思わせるには十分であった。八年程前に会っているはずなのに、ようやくこの時、二人が兄弟であることを理解した。

ベッドの方に目を移すと、そこには呼吸器をつけた祖母がいた。祖母は、呼吸が安定しないだ

けではなく、既に体を動かすことが困難になっていた。祖母が私と父親を見つけ、父親の名を小さく呼んだ。その後、父親が私を祖母のもとへと呼び私を紹介した。しかし、私は何を話せばいいのか分からず、自分から何かを言うことはなかった。

ここにいる理由は、孫であるというそれだけのことであったが、急に孫らしくすることは存外困難であった。寧ろ、孫でいることに甘え、祖母に何もしたことがなかったこれまでを悔やんでいたほどである。

ただ、伯父も父親も多くを話すことはなかった。その代わりに、父親が私に祖母の手を差し出し、握るように言ってきた。癌が全身に転移し、体を動かすだけで激痛と聞いていたので、軽く握るつもりであったが、意外にも祖母の握り返してくる力の方が強く、一瞬安堵したものの、その力強さは余計に私の不安を駆りたてた。

手を握り終えた後、祖母は伯父に呼吸器を外すように頼み、何か喋ろうとした。老体から振り絞られようとする声を聞き逃してはなるまいと、私たち三人は身構え、聞き耳を立てた。

――コーラ。

私は、あまりにも場違いな単語が発せられたことに当惑し、聞き間違いかと思い、どうしたらいいか分からずに、伯父の方を向いた。

――コーラ。

祖母はもう一度そう言った。

そうだった。祖母は毎日欠かさずコーラを飲んでいた。しかも、それは絶対に赤いラベルのコー

ラでなければならなかった。私が幼少の記憶を辿り直していた時、横で父親も、「コーラか」と合点がいったように呟いた。祖母は伯父に棚から小銭を取るように言い、その小銭を私に握らせた。私は急ぎエレベーターまでの道を戻り、一階のロビーの自動販売機で、絶対に間違えることのないよう慎重に赤いラベルのコーラを買った。

病室に戻ると、ベッドが起こされ、祖母は座るようにして私を待っていた。父親は三人分のコップを準備しており、私がそれにコーラを注いだ。祖母の分は吸い飲みに入れられ、伯父が飲ませた。結局、八年ぶりの再会で私が祖母に出来た唯一のことは、コーラを買ってくることだけであった。

今思えば、祖母がコーラを振る舞おうとしたのは、幼少の頃に見た祖母と同じような、不器用なりのもてなしだったのか、それとも、以前と変わらない姿を見せたかったのか、ただの日課だったのか、考えてはみたが、答えは分かりそうにない。とはいえ、このことで思い出したのは、初めて祖父母の家を訪れた際に振る舞ってもらったのは、コーラではなくカルピスだったという些細なことであった。

＊

その後、祖母に明日も会いに来ると告げ、老人ホームにいる祖父に会いに行った。祖父の入所している老人ホームは、空港近くにあったために、伯父の車に乗せられた私たちは来た道を戻るようにして、そこへと向かった。目的地に到着すると、そこはちょうど地域のイベント会場になっ

ており、祖父はパイプ椅子に腰かけ、和太鼓や小学生のダンスなどを楽しそうに眺めていた。祖父は、杖をつきながらも歩くことが出来るなど、遠目から見る分には元気そうに見えた。

祖父は「よく来たな」と笑顔で私を迎えてはくれたが、しかし、その後何度会っても私の顔と名前を覚えることはなかった。

祖父への挨拶を済ませた頃、日も暮れてきたので、もう一度伯父の車に乗り込み、祖父母が住んでいたマンションへ移動することにした。急な福岡行きで、宿を取っていなかったため、祖父母が暮らしていた、西鉄大牟田線沿いのマンションに泊まることにしたのである。中心市街地である天神まで数駅という立地で、沿線ながらも、街並みとは裏腹に閑静な場所にそのマンションはあった。高齢の利用者を想定したそのマンションは、一階には食膳コーナー、各部屋の風呂やトイレには非常ボタンが設置されているなど、日常空間が病院の個室病棟のようになっていた。

伯父によれば、ここでの祖父母の暮らしは、祖父が老人ホームに入所していることもあり、実質祖母の一人暮らしに近いものであったらしい。清潔に保たれた部屋は、祖母が暮らしていた時間をそのまま切り取ったようであり、今すぐにでも祖母が帰宅して元通りの生活を始めても違和感はないように思われた。

冷蔵庫には開封済みのペットボトルの水、シンクには残り少ない洗剤や、弾力を失いかけたスポンジなどが整然と並べられていて、寝室にあった箪笥にはポケットティッシュが隙間なく詰められていた。また、テーブルには祖母の名前の書かれた処方箋の袋がいくつも置かれていたが、奇妙にも祖母と私の苗字が一緒であることに驚きを隠せないでいた。父方の祖母ゆえに同姓であ

ることは容易に想像がつくはずなのに、私たち家族以外にこの苗字の人間がいることを一度も考えたことがなかったのである。

改めて部屋を見回し、テレビ台の横に飾られていたシーサーが目に入った時、祖父母が沖縄にいる私たちを思う時間があったということに、取り返しのつかない遅れの中で気づくことになった。ここで静かに余生を過ごしていた祖母は、私を孫だと思ってくれていたのだろうか。私は、ここで暮らしていた祖父母のことを、一度でも祖父母だと思ったことはあっただろうか。私が知らなかっただけの私を思う時間のあった場所にいることは、あまりにも衝撃的であり、やや屈折した居心地の悪さすら覚えた。この部屋では、私は孫であり、おそらく「沖縄の子」であった。沖縄にいた時には言われたことのなかった「沖縄の子」という言葉の回帰は、十年以上前のあの日に一瞬で連れ戻し、また私の体を締め付けはじめた。ここも、私の居場所ではなかった。

＊

父親の提案で、天神で夕食をとることになり、天神駅まで四駅ほど電車に揺られた。土曜日の夜ということもあって混雑した駅から十分ほど歩き、雑踏から距離を置いたオフィス街にある焼鳥屋に入ることにした。事前に、仕事の都合で年に一度は福岡を訪れていた父親が、その度に立ち寄る店だと紹介されていた。店主も父親の顔が目に入ると、馴染みの客であると分かったようで、そのままカウンターへと案内された。昨日と今日の精神の摩耗のせいか、今すぐにでも酔っ

てしまいたかったから手頃な芋焼酎を上から三つ、それぞれ一合ずつ頼んだ。それらが到着するまで間が悪かったので、父親に断りを入れ、トイレに行った。

便器に座り、スマートフォンを確認すると、例の職場から「もう顔も見たくありません。二度と私たちの目の前に姿をあらわさないでください」と連絡が来ていた。急な福岡行きで明日の出勤が出来なくなったことを伝えた後の返信がそれであった。

その文面は刺々しい質感と質量をもって私の体内に堆積し、徐々に胃を押し上げた。吐き出すものが何もない喉を掻き、涎と胃液が混じった刺激のある液体を吐き出したが、店内の喧騒のおかげで、汚い呻きが誰にも聞かれることはなかった。

直後、膀胱を内側から切り刻むような痛みに震え、便器に排出された尿に目をやった。

今思えば、私の身体の目に見える不調の発端は、初めて祖父母に会った翌年から発覚した血尿であった。体調に関係なく常に血が混じる尿を検査しても、原因の特定できない無症候性血尿と診断された幼い私は、母親に連れられ、惰性で毎月尿検査をおこなってはいたが、小学校を卒業する頃にはその通院も止めた。

元々それほど痛みのないものだった排尿に違和感を伴うようになったのは、他でもない先の新しい仕事を始めた今月の始めからであった。生理も人並みだったこともあってか、身体から排出される血自体について、それほど深刻に考えたことはなかった。しかし、便器に溜まる尿が、目視で確認できないはずの血と分離して見えるようになってしまっていたのだ。さらに言えば、空気に触れれば赤単色であるはずの血が、二色に塗り分けられたように分離し、その赤二色の混

濁という幻覚すら見えるようになっていた。この血尿や、血の混濁を見るたびに、全身の血の気が引け、心臓の音以外が聞こえなくなり、身体が瘡蓋のように凝固していく感覚に襲われた。

もう一度、スマートフォンに表示されていたあの文面を見た。私は、結局あの職場から解放されたのだろうか。おそらく違う。解放ではなく、拒否されたのだ。

＊

何も考えたくなかった。

席に戻り、運ばれてきた酒を飲み、焼鳥を食べながら、父親と今回の福岡行きについて話をした。父親が祖母の容態を案じていたことはすぐに分かった。ここ数年、祖母に会いに行かなければならないと常々私に言っていたことがようやく果たされたということに、父親は安堵していたのだ。祖父母が横浜にいた数年前は兄が訪れ、東日本大震災直後には両親と弟で福岡に会いに行っていたことを語っていた父親の口調は、普段と変わりないものだった。時たま、私だけが十年近く会っていなかったことを強調して、いい親孝行になったと笑っていた。

二十三歳の頃、祖父母への相談もなしに横浜から沖縄に移住することを決めた父が、意外にも祖父母と仲が良かったことに驚きはしていた。もし仮に、今同じことを私がしたとして、私は両親と不仲にならずにいられるだろうか？

そのような心配ともつかぬ心情をよそに、先ほど胃液が通過した喉元にしみる酒が、身体と思

考の自由を奪っていくなかで、父親の他愛無い言葉が、私の頭を強く打ち付けた。

——お父さんにとって、横浜は故郷だけど、今両親が住んでいる福岡が本当の故郷という感じがするね。

言葉の意味が分からなかった。ここ数年のこととはいえ、毎年訪れている土地に親しみを覚えるのは全く不自然なことではないが、幼少と青年期を過ごした土地ではなく、五〇代になって本当の故郷が出来るということは、一体どういうことなのか。

ふと、こんな言葉がよぎった。

——じゃあ私の故郷はどこになると思う？

——沖縄しかないんじゃない？

私の問いかけに即答する父親の言葉は、当たり前のことを聞くなという態度を隠しもせず、ただ事実を告げるだけのような業務的な返答であった。父はこう続けた。

——日本と沖縄のハーフで顔も綺麗に生まれたんだから、血も混じるって素晴らしいことじゃないか。

私に日本と沖縄の血が混じっているから良い？

——沖縄の離島の人なんて血が濃いから病気の人も多いしね。血が混じって丈夫なんだから、自信持ちなよ。

普段から研究のことで口を出されることに反発していた私は、この期に及んで反論しようとしたが、言葉より先に吐き気がこみ上げてきたために、急いで口を手で塞いだ。

「沖縄の離島の人」という言葉は、最南端の有人島出身の母親を経由して、私を撃ち抜いた。私と母親の血は、父親にとって潜在的には病理でしかないのだろうか。

その後はとりとめのない話題が続き、父親の酔いに任せて屋台やバーを梯子することとなったが、その間も、脈動を感じる度、激しくうねりながら混じりあう二色の血の奔流が、身体の隅々をかき乱していく恐怖に深くとらわれてしまっていた。

＊

福岡にいた三日間、毎日祖母に会いに行った。初日と二日目に、父親が、何気なく「明日も来るよ」という言葉を祖母に話していた様子は、父親自身が祖母の死を繰り延べていくための暗示にも聞こえた。最終日には、伯父と伯母、従姉も揃っていた。しばらく祖母と伯父家族と、明日沖縄に帰る旨の話をしていたが、伯母の目が赤くなっていたことに気づいた。

伯母と従姉が病院のロビーで弁当をひろげ、昼食の準備をしていた時、看護師から伯母に手渡された小冊子が私のもとにも回ってきたが、その時に、先ほどの伯母の表情の意味を知った。「ご家族の方へ」と題された五頁程の小冊子が突きつけたのは、これからの祖母の容態の変化や、死にゆく人の見送り方という、いわば祖母の死への備えであった。しかし、うわごとを言い始め、排泄の回数が減っていく、そういった具体的な死にゆく祖母の身体を目の前にしても、私はまだ祖母の死期を受け止めることが出来なかった。祖母の死によって、私自身の何かが確実に欠けて

しまう気がしていたが、それをどのように説明することが出来るのかが分からない。この否認のためだけに、祖母の死を受け入れることが出来なかったとさえ言える。

昼食を終えて病室に戻り、私も父親を真似て、祖母に「また来るね」と伝えたが、これが生きた祖母との最後の会話となった。

＊

沖縄に戻った次の日から、祖母の来る死に向けて、家族は支度を始めていた。喪服のクリーニングやスケジュールの調整等、決して望んではいない次回の福岡行きに備えることは、祖母その人よりも、私たちが祖母の死に直面する意味を問わせずにはいられなかった。祖母がいなくなると、どうなるのか。伯父家族の涙を見て、彼らにとっての祖母の死と、私たちにとっての祖母の死と、同じようなものであると言えるのだろうか。また、祖母が伯父家族と私たちへ向ける感情がどのようなものであるか、想像することは容易ではない。どちらにしても、それぞれの想いが同じものであるとも思えなかったし、個人的な願望としては、別物であってくれた方がよかった。

沖縄に帰って二日ほど経った水曜日、浪人生の弟を予備校まで迎えに行き、近くのスーパーのフォーマル服売り場で、二人分の喪服を買い揃えた。その後、近所の食堂で昼食を済ませたのだが、唐突に、弟にとって祖母とはどういう人物だったのかを聞いてみたくなった。しかし、料理が到

着するまで漫画を読みふける弟に、そのようなことを聞くのは憚られた。

おそらく、弟は「祖母は祖母だ」と答えるだろうと予想がついたのだ。私以外の家族全員が口を揃えて言うが、親戚という関係は、そもそも疑問を持つようなものではないし、考えても仕方がない、親戚は親戚だから親戚なのだ、ということらしい。とはいえ、たとえこれが同語反復的な関係だとしても、私はまさにその親戚から「沖縄の子」として呼びかけられたことに、異常なまでの執着を感じてしまうのであった。

もっとも、私の身体は「沖縄の子」である特徴を探せば、ほぼ全てが当てはまるほど「沖縄の子」そのものだということも、この不安の大きな要因であった。目の大きさや肌の色、濃い体毛など、「沖縄の子」を自認するのも案外容易だったはずなのだが、当然ながら、通常の生活が既に「沖縄の子」らと過ごしているものである以上、改めて「沖縄の子」であることを意識する必要はなかった。しかし、沖縄で生活していると、苗字や言葉、立ち居振る舞いのせいで県外出身者として扱われることも常であった。自己紹介の後に、父親と母親の出身地を告げると納得してもらえるほどには典型的な「ハーフ」であったのだ。また、沖縄県内の観光地で観光客的な装いでいれば、「沖縄の子」とは言われないほどには「擬態」が身にしみついていた。

対して、兄と弟の身体的特徴を客観的に観察した時、彼らには「沖縄の子」としての要素を見つけることが難しかった。兄弟ゆえに顔が似ているなどの特徴は見出せても、彼らの身体は、私のそれとは明らかに異なる形質を備えていた。正確には、彼らから、「私は違う」と言われ続けていたから、私こそが異質なのだと受け止めていた。切れ長の目。日焼けをしても赤くなる

だけの白い肌。私より薄い体毛や、うねりのない髪。体型も、私の丸みを帯びたものとは違い、手足の長いやせ型であり、それらは私の羨望の対象となっていた。そんな彼らにとって、「祖父母」は、疑う余地なく「祖父母」であったのだ。

注文していた沖縄そばを食べ終え、再度弟を予備校へと送ったが、私は家に帰ることを躊躇していた。仕方なく、適当な喫茶店に入って、全く飲めないブラックコーヒーを頼み、一杯飲み切るまでは帰れないことを言い訳にして時間を潰すことにした。卒業論文の参考文献を読む算段ではあったが、カフェインによる眩暈と激しくなる動悸と胃の痛みから、読書はほとんど進まず、二時間ほどしてようやく一杯を飲み終え、家に帰る決心がついた。

＊

金曜日の夜、父親から祖母が亡くなったと知らされた。来月あたりだと勝手に高を括っていた私にとって、意外にも早くその時を迎えてしまった、というのが率直な感想であった。

翌朝には、那覇空港に向かう道中に小禄の航空会社で家族四人分のＬＣＣの航空券を購入し、すぐに福岡へと飛んだ。手荷物の多さからも、先週とは全く違う意味合いの福岡行きになることは明白であった。

事前に宿泊の予約などを済ませていたので、福岡空港に到着してからは地下鉄で天神駅まで行

き、お昼頃には駅近くのホテルにチェックインをした。まもなく、東京から来た兄も合流した。元々、沖縄で同級生の結婚式があり、たまたま法要と全く同じ日程で休暇をとっていたらしく、急遽沖縄行きをキャンセルして、陸路で福岡までやってきたという。

家族五人が揃うことが数年ぶりということもあり、両親の宿泊している部屋で集合写真を撮ることになった。ダブルベッドに全員が腰かけたことで、家族と私の身体が触れることになったが、私はこの接点の温度にたじろいでしまった。彼らの身体にも血が流れているために体温があるのは当たり前なのだが、その体温にすら嫌悪感をおぼえた。少々不格好に体を浮かせたまま撮った写真は、両親と仲良さげに写る兄弟とは、物理的な距離以上の隔たりを感じさせた。写真を見た母親に「何故笑わないのか」と問われたが、理由は単純で、笑う理由が何一つなかったからである。

＊

翌日、通夜の会場へと向かうために、西鉄大牟田線天神駅から八時過ぎ発の普通電車に乗った。時折、昨日の夜から降り続いた雨が、車窓を打ちつけていた。私たちは三〇分ほど行ったところの小さな駅で降り、そこからは従兄と伯父の運転する車で、さらに約一〇分かけて会場に到着した。

ロビーで伯父家族と軽く話した後、祖母が安置されている部屋へと案内された。今にもコーラをねだりそうな顔で横になっているからか、祖母の遺体を目の前にして、危うく、先週のように「また来たよ」と言いかけてしまった。一度言葉を飲み込み、先週の祖母との写真を見返してみたが、

たしかに先週の顔に感じられた生気のようなものは失われていた。

しばらくして、祖母の死化粧と納棺の案内があったため、私たちは席を外し、ロビーで待機していた。誰一人口を開くこともなく、小雨の雨音さえ聞こえるような、耳に痛いほど静まり返ったロビーで、私たちは時間を持て余してしまっていた。

沈黙に耐え切れなくなったのか、従兄の提案で、祖母が納骨される予定の墓を見に行くことになった。車で三〇分ほど走り、スマートフォンが圏外になるほどの山奥を広大に切り開いた分譲墓地の一角に、〇〇家と書かれた墓があった。小雨の降る中、墓石の汚れを軽く拭き、地面の草取り程度の清掃をし、とうとうすることのなくなった私たちは、二〇分ほどでまた会場へと戻った。

まだ日中だったので、私は一人で周辺をふらつくことにした。目につくのは、ショッピングモールや、やたら広い駐車場のあるファミリーレストランやコンビニといった典型的な郊外の街並みであった。これといった収穫はなかったが、手持無沙汰だったために、とりあえずコンビニで板チョコを買い、そのチョコが手の熱で溶けてしまう前に食べ切れるかという小さな試練を課しながら、来た道を引き返した。

＊

夕方になり、通夜が始まった。棺に入った祖母の顔を見ると、薄く施された死化粧が、元々化粧気のない祖母の死に色彩と輪郭を与えていた。一方、壇上に置かれた遺影は、普段の割烹着姿で、

背景と髪を軽く修正しただけの簡素なものであったが、よく見ると、表情は普段よりほんの少しだけ顰め面であった。

焼香の際、祖父や伯父家族は、全員が目に涙を浮かべていた。他の参列者も各々の祖母との時間を思い出しながら、耐え難い喪失に目元を覆う人もいた。それに反して、私たち家族は誰一人、息子である父親ですら表情を変えず、淡々と焼香を上げていった。ただ、私を含めた家族全員が、この場でどのように振る舞えばいいのかが分からなかったのだと思う。差こそあれ、やはり祖母との関係が濃密であったとは言えない私たち家族が、祖母を看取った伯父家族と同じ哀しみを分かち合うことは、おそらく出来なかった。今私たちが感じている哀しみは場違いなのではないか、少なくとも私自身はそのような後ろめたさの方が強かった。

通夜ふるまいでは、親戚一同でオードブルを囲み、生前の祖母について語っていた。父親と伯父が「人が死ぬと、人が集まるから、ただ悲しいだけではない」と繰り返していたのは、息子である彼らこそ、強く祖母の死にとらわれていることを感じさせた。

トイレから戻る途中、喫煙所で伯父の後ろ姿を見かけたが、反射的に伯父から目をそらしてしまった。咄嗟に、直視してはならないと思ってしまったのだ。私から数分遅れて戻ってきた伯父は、従兄に、家にある焼酎を持ってくるよう言いつけ、また楽しそうに思い出話に耽っていたが、声に覇気は感じられなかった。父親も同様に、酔いもあって赤ら顔に笑みを浮かべていたものの、話す言葉の節々には、静かなため息が漏れていた。

長居無用とのことで、私たちは二十一時頃に会場を後にして天神のホテルへと戻った。電車内で明日の日程を軽く確認した後、家族と別れ、コンビニで朝食と絆創膏を購入した。そして部屋に戻り、シャワーを浴び、簡単に明日の準備を済ませたが、疲れからか、ベッドに入るとすぐに眠りについた。

＊

七時過ぎに目が覚め、まだ酒の抜けていない体を叩き起こし、顔を洗い、髪をとかした。消臭剤をかけていた服からは、かすかに線香の匂いが漂ってきた。慌てながらも、昨日買っておいた味噌汁とおにぎりを胃に入れ、軽く化粧を済ませてから、靴擦れしている右足に絆創膏を貼り、先に部屋を出ていた家族と合流し、昨日より一本遅い電車に乗った。

天候が回復したせいか、昨日は気づかなかったが、片田舎を貫く線路の周りには、秋の足音を感じさせるように、穂がふくらみつつある稲が、風になびいていた。米軍基地のそばで育った私には見慣れないものであるはずなのに、何故か郷愁を誘われた。これが父親のいう故郷なのだろうか。

ちょうど駅に到着する頃、膀胱に軽い痛みと尿意を催し、下車後すぐにトイレに駆け込んだ。

会場に到着し、伯父家族に挨拶を済ませ、急いで私たちも線香をあげた。まもなく、本日二度目の朝食である精進料理が供された。残すのは儀礼的によくないのであろうという体面上の理由で、

隙間のない胃に無理やりねじ込んだ。

元々近しい親類だけの式だったために、通夜同様、葬儀もすぐに終わり、そのまま火葬場へと移動することになった。

葬儀社のバスの中で、私は祖母の遺影を持つことになったが、私には額縁以上の重さに感じられていた。奇妙にも、遺影の視線が私に向けられているような感覚に陥ってしまっていたのである。錯覚を利用したトリックアートのようなものとしてではなく、祖母の視線の先にいる私を名指すあの言葉の呪縛が、未だに私を縛り続けていることの実感として感受される重さとなって迫ってきたのだ。この重さがじわじわと私の膀胱を圧迫していたために、火葬場につく頃には、下着に小さなしみをつけてしまった。

火葬場に到着後、祖母の棺が用意されていた焼却炉前に、親族一同が集合した。私は母親に遺影を預け、トイレで身なりを整え、少し遅れて彼らのもとへ向かった。焼却炉へと棺が運ばれるに至り、最後に祖母の顔を見た祖父と伯父家族は、祖母に向けて何か言っていたが、私にはその内容が聞き取れなかった。

＊

完全に骨になるまでには二時間ほど時間があったため、待合室で親戚と話していたが、話題の中心は、私の進路に関するものとなっていた。修士課程への進学にかかわる学費の問題や、研究

職のポストの少なさから、伯母は私の身を案じていた。両親も、普段と同じように、一般企業への就職か公務員採用試験を受けるようにと言ってきた。文学研究をやることが収入に繋がるかは分からないので、それよりも普通の職業に就いたほうがいいという真っ当な心配に何か反論するわけでもなく、彼らなりの優しさに適当な相槌を打つしかなかった。祖父にも、親に迷惑をかけてはいけないと諭された私は、居心地の悪さから、話の切れ目で逃げるように退室し、フードコートの端に座った。ただ座っているだけでは不自然だったので、目についたラーメンを頼み、一口だけ手をつけ、特に何をするでもなく無為に過ごした。

テーブルの向こうの他の参列者を眺めているうちに一時間ほど経ち、場内放送で祖母の焼骨が完了したアナウンスが流れた。急ぎ、冷え切って脂の固まったラーメンを口に詰めたが、無理が祟って直後に嘔気を催し、再度トイレに駆け込んだ。口元をすすぎ、落ちた口紅だけ薄く塗り直し、胃の震えが続く中、待合室へと戻った。

＊

骨になった祖母を目の当たりにして、私は、ようやく祖母との死別を理解した。祖父から順に遺骨を壺に納めていくなか、骨の所々に焦げとは異なる黒い点が見えたが、伯父から祖母の骨に転移した病だと説明がなされた。身体を蝕んだ病が目に見えるかたちで現れたことは、祖母が痛苦に耐えていた時間があったことを、私に強く思い知らせた。

係員の指示に従って箸で骨を割り、壺に納めていく祖父や伯父家族には、祖母という喪失をどのように受け入れるかと苦悩した深い哀しみの表情が浮かんでいた。彼らにとって、骨ひとつひとつが祖母その人であり、またそれらは祖母と過ごした日々の欠片でもあり、そして何よりも彼らと祖母を繋ぎとめる証でもあった。

祖父や伯父家族、両親や他の親戚が七割方の骨を壺に納めた頃、私に箸が手渡された。係員から近くにあった少し大きめの骨を割るように指示を受けたので、力を入れて上から箸を叩きつけた。左腕の部分にあたるその骨が割れた瞬間、突如、私の身体もその骨と同じ部分が強く打たれたように痛み、その骨を持ち上げ、壺に運ぶ間、自分の腕も挟まれて運ばれるような感覚をおぼえた。別の骨を納める際も、またその部分と同じ箇所が痛んだ。それからは、誰が骨を納めても、私の身体の同じ場所の内側を直接叩かれ、骨や周りの筋肉などが引き裂かれるような痛みが続いた。

痛みで意識が朦朧とする中、熱気に混じる祖母の焼けた匂いと私の濁った血とが重なり、台上にある祖母の骨が私の身体のように感じられ始めていた。祖母の骨を割る行為を、私の一部を私自身の手で割るように感じる倒錯的な感覚は、失われたはずの祖母が、依然として私を呪縛していることを、文字通りの痛みとして私に知らしめた。

最後に、祖父が頭頂の骨で蓋をするように遺骨を納め終えようとした時、頭を鷲掴みにされるような鈍痛が襲った。この鈍痛は、頭蓋骨にめり込みながら私の頭の中心を目指すように侵入し、中心に至ってからは、私を蓋で塞ごうとする重石となり、頭蓋骨から背骨を縦に圧し潰すような

痛みに変わった。
祖父が骨から箸を離すと、痛みは消え、頭の血管の急激な弛緩によって視界が白くかすんだ。壁にもたれていられたので、体勢を崩すことはなかったが、炉の熱気とは別物の冷や汗が首筋に滲んでいた。

その後は場所を移動し、遺骨法要をおこない、伯父の家の仏壇に遺骨を供えて葬儀は終了となった。昼頃には全ての日程が終わったものの、参列者には二日間の疲労の色が見えていた。しばらく談笑した後、伯父の挨拶で解散となった。私たち家族もホテルへ戻るために玄関に行くと、伯父と伯母から「〇〇ちゃんも、遠い沖縄からありがとね。また来てね」と声をかけられた。
何も出来ない私を、姪として、たったそれだけの理由で歓待してくれた伯父と伯母、そして何よりも、死期の直前に不躾にやってきた私にコーラを振舞おうとした祖母に、返す言葉が見つからなかった。しかも、かけられた言葉が、私自身が何の気なしに祖母に向けて言ってしまった無責任な「また来るね」のように、再会を望むものであったことが余計に苦しかった。
何故、彼らは私との再会を望むのか。私は、彼らに再会を望まれる何をしたのか。私はハンカチで目元を覆い、まだ靴擦れの痛む足を労るようにして、そそくさと従兄の車の後部座席に乗った。もうこれ以上、この顔で彼らの前にいることが恥ずかしかった。

＊

その夜、私たちは家族五人揃っての最後の食事をすることにした。場所はやはりあの焼鳥屋であった。

細々とした注文が面倒なので水炊きを頼み、煮えるのを待ちながら、この数日を振り返っていた。まだ鍋の野菜のかさもそれほど減っていない頃、ビール二杯を飲み終えた父親が、今回の葬儀の総括めいたことを口にした。

――親戚はたまに会えるから親戚で、たまにしか会わなくても心配してくれるからこそ親戚なのだ。そして、誰かが亡くなれば、また集合することが出来る。だから親戚を大事にしなければならない。

このような台詞を父親が言うとは予想していなかった。とりあえず、父親が満足そうなことは分かったが、母親も「家族や親戚は大事にしなければならない」と説教じみた様子で私たちに諭していたのは、少し気味が悪かった。聞き流してはいたが、家族や親戚を大事に思うという倫理的に見える要請は、私にとっては脅迫めいた言葉にしか聞こえなかった。

食事を終えた私たちは、両親と別れ、兄の提案で、兄弟三人で飲みに行くことになった。繁華街へと戻りながら、兄は慣れた様子でキャッチから店を聞き出し、駅とホテルを結ぶアーケード沿いにある商業ビル六階の大手チェーンの居酒屋に入店した。

はじめ、兄は私の成人を祝い、一緒に酒を飲めることを喜んでくれていたが、しばらくした後

に真面目な口調で「次に俺たち全員が揃うのは、おそらく両親のどちらかが亡くなった時になるだろう」と呟いた。曰く、兄にとって今回の祖母の死は、近い将来の両親の死を長男として考える機会になったということを伝えたかったらしい。ただ、兄の結論は、私が両親の面倒をみた方がいいのではないか、というものであった。「金は出すから具体的なことはそっちで考えてほしい、その方が両親としても幸せではないだろうか」等、いかにも親を思う子の純粋な気持ちのように思えた。

ひとまず即答は避け、弟にも話を振り、老後は心配だという内容に話をそらそうとしたが、しかし、弟も県外の大学への進学を希望していることからも、最善策は、私が進学するなら県内の大学院に進み、そのまま県内で就職することだと強く訴えた。思い返せば、両親も老後の面倒は私にみてもらうつもりでいるようであった。彼らの言葉には、私の意思などなかったのだ。

この時になって思ったのは、私は他ならぬ家族によって、沖縄以外で生きる道を奪われ、沖縄で生きるために「ナイチャー」として生まれたのではないかということだった。それを父親の牧歌的な故郷であるこの福岡の地で感じたのであった。

おそらく私にとっての故郷とは、遠くにあって思うものではないし、失われていく過去としてあるわけでもない。与えられた故郷である沖縄は、私を沖縄から疎外し、沖縄以外のところで執拗につきまとう怨霊としてしか説明できない呪縛そのものとなっていた。また、沖縄らしさが微塵も感じられない姓名は、沖縄以外の場所で、名乗りを必要としない場面では無効化し、身体的特徴を引用する「沖縄の子」という呼びかけを放置しながら、沖縄では「沖縄の子」であ

ることを許さない禁令として絶えず「ナイチャー」という枷をかけ続けている……。

膀胱と尿道が痛い。兄と弟に断りを入れ、席を立った。急いで便器に腰かけ、一日に二回も下着を汚してしまったことを悔いた。尿道を通過する尿は刃物のように鋭利で、苦痛に顔が歪んだ。しかし、尿の色は、出血しているかどうか分からないような黄色で、痛みとの落差を思わせたが、私の目には汚く混ざった二色の赤が映っていた。痛みが引くまで、深呼吸を繰り返して動悸を鎮め、ひとまず気持ちの平静を保つことにつとめた。

席に戻り、遅くなったことを詫び、氷がとけて炭酸の抜けたコークハイを飲み干した。兄に「恋人にでも振られたか」と冗談を言われたが、返す余裕もなく、ただ曖昧な返事をした。二人は、弟の卒業後の進路について語り合っていたという。教員採用試験か院進学を視野にいれた将来設計を聞かされた私は、弟の希望に満ちた顔から目が離せなくなった。弟の視線の先には、未来があるのだろう。私の視線の先には何もない。何も見えてはいない。私が誰かの視線の先にいるだけだ。

試しに、私の夢を語ってみようと、思いつくままに喋ろうとしてみたが、何も出てこない。

——私って本当に何も出来ないよね。アルバイトのひとつも満足にいかないし、勉強だって、たまたま推薦入試で地元の国立大学に入れただけで頭がいいわけじゃない。お父さんとお母さんの面倒くらいはみなきゃ皆に悪いよね……。私、頑張るから……。

咄嗟に口をついて出た妙に冷め切った言葉に、私自身が一番驚いた。私は、誰に話しているのか。私は、誰の言葉を話しているのか。私が私について語る言葉が見つからなかった。私は、私ですらなかった。

＊

その後の四十九日法要、一周忌、三回忌に出席した私は、伯父家族に会うたびに「また来てね」と呼びかけられ、小遣いを渡されるのが恒例となっていた。三回忌に伯父の家で法要をおこなった際、仏壇のそばには果物の篭盛りや、鳥を模したサブレーと合わせて、あの赤いコーラも供えられていた。

結局、私は内部進学をしたが、学費免除全てが不受理となったために、修士二年の春から一年間の休学を申請して、六月からフルタイムで働き始めた。就業の形式はどうであれ、伯母に働いている旨を告げると、それ以上の詮索は止んだ。安心してもらえるなら、それで良かったと言い聞かせた。

新しい職場では、職種上、私の姓と擬態でしみついた標準語に近い口調とが功を奏していた。しかし、昇進の際に、上司が私を褒めるつもりで言ったらしい「清廉なナイチャー」という珍妙な名称は、私を二年前の恐怖に立ち戻らせた。

私にとって、祖母の死とは何だったのだろう。

このように問う私自身、二年前と何も変わってなどいない。相変わらず、私は、誰かに説明されること以外に、私を説明する言葉を持っていない。それでも時たま思い出すのは、通夜で生前の祖母を語ったナレーションの「いつも人のことばかりで、自分のことは後回し」という文言だった。

――違う、そうじゃない。おばあちゃんも……だったの？

ふと、コーラの糖分が喉に張りつく感触が思い出され、祖母について語らせまいと、私の喉は塞がれた。言葉は、言葉になる前に消えていった。

竹澤　さち（たけざわ　さち）／琉球大学・人文社会科学研究科博士前期課程二年

小説部門佳作

# 密輸事件簿・・・密輸犯を絞り込め

沼田　健次郎

## 序章　南方海上の不審船

平成二十八年九月二十日、第十一管区海上保安本部は与那国島沖の南方海上で国籍不明の船舶から海上に投棄されたビニールの包みから覚醒剤約百キログラムを押収したと発表した。沖縄地域での押収量としては、過去五番目の量となるもので、捜査当局は合同で背後関係を調べている。海上保安庁などによると、日本の排他的経済水域内をパトロール中の巡視船が不審な漂流物を発見し回収したところ、ロープで連結された五十リットリ程のクーラーボックス二個で、中には白い粉状のものが入った袋が五〇個ずつ収納されており、鑑定の結果全て覚醒剤だった。

そのころ、巡視船から二十キロメートル程離れた南方海上では、台湾方面から現れた国籍不明の漁船らしき船舶が投棄した不審なビニールの袋八個と五十リットル程度のクーラーボックス二個を回収した日本の漁船がいた。この漁船は、エンジン・トラブルのため、急遽、石垣港

に入港して修理することとなった。

この漁船には、漁師とは思えない船員や、漁と全く関係がない溶接器具やペイント等が積み込まれていたのだ。

## 第一章　桜田の日常業務

桜田健次郎は、七月一日付で沖縄地区税関から横浜税関の貨物検査を担当する統括官を命じられ勤務していた。泡盛やコバルトブルーの海や白い砂浜などを思い出しては、既に二カ月半も経過したにも関わらず沖縄病からの回復が遅れ、急激な環境変化に伴う緩衝期間というような日々だ。

統括官の業務は、貨物動向や各種の情報、検査結果の取り纏めだが、その他には所属職員の管理などだ。

税関の貨物検査は、輸出(輸入)申告された内容と貨物の同一性を確認することにある。課税標準となる価格・数量、関税率が申告通りか否か、また、知的財産権の侵害や原産地表示に問題がないか、他の法令等による規制品に該当していないか、申告された貨物以外の物がないか等が重要な確認事項だ。

税関への申告は、個人が行う場合と輸出入者が通関業者に依頼して行う場合があるが、その殆どが通関業者によって行われる。この通関業者による申告は国家試験に合格した通関士が確認して行うから書面上の誤りは極めて少ない。しかし、税関検査で申告と異なる貨物が確認さ

れた場合には、課税標準となる数量や価格の変更、税率変更も伴うから、検査トラブルは日常的だ。

もちろん、けん銃や麻薬などを発見した場合には、直ぐに密輸調査に移行し、捜査を担当する密輸取締担当の審理官との協力も必要となるから、いずれにしても貨物検査が行われている時間帯は気が抜けないのが実態だ。

## 第二章　島風に吹かれて

### 一．沖縄への転勤

税関の人事異動は七月。二年前の七月、桜田は沖縄地区税関への転勤を告げられた。人事異動は二～三年周期であるから、ある程度予想はしていたが沖縄とは考えも及ばなかった。

これに先だつ六月初旬、突然上司から別室に呼び出しを受けた。

急な呼び出しに、何事かと不安がよぎったが転勤の打診だった。

「沖縄地区税関に出向してもらう話がある。大丈夫か」

いつもながらのストレートな言い回しだ。少し気を使っているのか、いつもより心なしか声が柔らかく響いた。

もちろん、独り身の桜田には支障となることは何も無い。気軽さが売りだから、地球の裏側に行けと言われても答えはいつも同じだ。

「支障ありません」

「約束はできないが、情報管理官を担当すると聞いている」
「了解しました」
「情報管理官は重要な部署だ。よろしく頼む」
桜田には心当たりがあった。
貨物を輸出又は輸入するためには、税関に申告してその許可を受ける必要がある。その一連の手続きを「通関手続き」というが、その殆どが「輸出入・港湾関連情報処理システム」により電子的に処理されている。このシステムでは申告と同時に即許可（区分一）、書類審査（区分二）、貨物検査（区分三）の三つに区分する判定が行われる。つまり、問題がなければ許可、密輸や法令違反のリスクが高い場合は検査という具合にシステムで判定するのだが、このシステムに深く係わった時期があったのだ。情報管理官は、その心臓にあたる業務なのだ。
それにしても沖縄とは驚いた。十年ほど前に一度、柔道部の有志と観光に行ったが、そこで生活するとなると、どんな世界が広がっているのか大きな期待と不安がよぎった。

二．うちな～の風

七月一日の辞令交付。午後には引越し荷物を発送した。
独り身の荷造りは一日で目途もつくが、官舎からの転出手続きは大変な作業だ。特に官舎管理人から受けた指示を全てクリアーするのは至難の業で、畳表や襖の張替え、そして、全ての部屋の壁の塗りかえは必須。さらに、鍵の閉まり具合が悪いとか、思いもよらない改善指示も

あり、その殆どを業者へ依頼しなければならず、相応の出費も覚悟しなければならない。それらを何とかクリアーして、七月五日の午後羽田から那覇に向かった。

飛行機を降り立つと南国特有の蒸し暑さに戸惑いを感じた。厚く重い熱風は、東北出身の桜田にはかなり厳しい環境だ。

船便で送った車を新港埠頭で引取り、同僚の案内で入居予定の浦添にある公務員住宅に向かった。管理人から鍵を受取り部屋に入ると、そこは数ヶ月間未入居の部屋だった。

床や壁、天井には、薄っすらと白いものが覆っている。よく見るとカビだ。どこから手をつければいいものか、しばし呆然と立ちすくむほかなかった。付添ってくれた同僚も独り言を呟きながら、窓、雨戸を全て開け始めた。

「人間の住むとこじゃないね。この壁はブヨブヨだし、こっちの窓の鍵は壊れている」

横浜の官舎を出る時は、入居時以上に綺麗に現状回復したのに、この官舎はよく見れば窓ガラスにまでカビが生えていた。壁は、湿気で表面が浮き上がり、風呂の床や壁は、ところどころ剥がれ落ちていた。

そんなところに管理人が様子を見に来た。すぐに現状を見て貰ったが、管理人も言葉を失った。桜田は申し出た。

「不都合な箇所は、至急改善して下さい」

管理人は、改善が必要な箇所を文書で提出するように求めたが、

「管理人が確認した事項は、自ら処理すべきです」

と反論した。明らかに管理人の業務ではないかと考えたからだ。
長旅の疲れと官舎の酷すぎる現状、そして、既に夕刻という時間から、桜田は精神的に強い疲労感を覚えていたのだ。
管理人に落ち度が有る無しに関らず、強い口調になった事は反省すべきだ。沖縄移住者の『最初の文句が住居に関する事』と、どこかの雑誌に記載されていたことを思い出した。
桜田は、そんな風には絶対にならないと心していたのだが、沖縄初日からこれでは、先が思いやられると感じた。そして、ここで上手くやっていけるのだろうかと大きな不安がよぎった。しかし、桜田にとって、ここ沖縄での二年間が大きな意味を持つことになるのだ。

三:連携の大切さ

七月六日の午前、沖縄地区税関長から転任辞令を受けた。
辞令には「情報管理官を命ずる」とあった。輸出入通関業務を支援するため、通関業務全般の情報管理が主な仕事だ。当然、この情報には密輸や脱税に関する事項も含まれている。
挨拶も早々に前任者から引継ぎを受けた。その内容は、ほとんどが受動的な業務だ。施策もあるが、通関業務との関係を極力避けているような事柄ばかりで、意地悪な見方をすれば、単に入手した情報を流しているだけだ。
どのような支援を求められているのか、あるいは出来るのか。そういった視点で検討されたものは皆無に等しく、輸出入通関手続きを担当する通関業務担当との意見交換すら行っていな

いようだ。

情報管理官は、密輸取締や輸出入が禁止・規制される貨物、関税等の徴収などの情報を管理するからこそ、通関業務を強力に支援することが可能となるのだ。桜田は、前任者が部屋から出ると直ぐ、部下の金城係官に伝えた。

「情報管理官の仕事は通関業務を支援する事だ。現状分析を進め、通関業務担当に問題や提案などを示すことになる。前任は受動的な考えだったが、我々は能動的に動きたい。全く異なる対応だから、通関業務担当から反発もあるだろう」

桜田は、官舎管理人が不適切な箇所を自ら確認したにも関わらず文書で報告を求めたことに激怒したが、前任者から引継ぎの説明を聞きながら、このように能動的な仕組みが職場の中にあるのではないかと疑念を感じたのだ。

しかし、金城係官は、七月一日に着任後、前任の花城係官のアドバイスを受けながら既に検証を始めていたのだ。

「様々なデータを有効に活かした支援内容を考えています。まずは情報管理官が取扱う情報を具体的に理解して貰うことになります」

コンピュータにも精通し物事を論理的に構築する力もある。通関業務担当との『連携』のあり方にも理解を示しており、桜田は面白い仕事ができると直感した。

数日後、金城係官から輸入貨物に着目した資料の説明があった。輸入件数と誤びゅうの関係を判り易く分析し、併せて、通関業務各担当の特徴も示され、審査・検査の際のリスク判断の

資料としても活用できる内容だ。
早速、通関業務担当と情報管理官との会議を開催した。
このようなやり方は、初めてだったのだ。
「それぞれが所管する通関業務担当においては、数値で示されたような特徴がある」
桜田が配布した資料の説明を進めていると、それを妨げるように古参統括官が発言してきた。
「情報管理官は、通関業務の情報を提供するだけで良い。我々の業務に口出しするのはどうなのか」
「通関業務で重要なのは、審査・検査の際のリスク判断だ。どのような審査・検査とするのか、その判断に際して活用できる情報は、通関手続きを適正・迅速化することに繋がる」
等と桜田が反論すると、
「情報管理官の指示に従って業務処理をしろということか」
といった厳しい反論を受けてしまった。
そして、このようなやり取りが暫く続いた。
最終的には、情報管理官が作成した資料を活用することにされたが、何も決められなかった。
会議後、書記として出席していた金城係官が感想を話してきた。
「我々の情報を理解する人がいる一方で、その活用を考えない職員がいて残念です」
「この会議の継続が、必ず理解に繋がる。提案の作成で忙しくなるぞ」
金城係官は、桜田の言葉に頷いた。

その頃、桜田は、出向者の一人からこんなことを言われていた。
「情報管理官はやり過ぎではないのか。波風が立つぞ」
「意味が判らない」
と応じたが、正論であっても『今迄と違うことを始めると大変だぞ』という忠告だったのだ。

四.展望が開ける

情報管理官と通関業務各担当との会議は継続していた。双方とも慣れるまで随分と時間が係るものだと思いながらも、一方では、『今度は何時開催するのか、こんな資料や情報はないか』との質問が寄せられるなど、明らかに変化の兆しも表れていた。
しかし、この手法を疑問視する先輩方の意見も多く聞かれた。その度に、『今までやっていないこと』をするのだからと話し込んだ。
そんな頃だった。絞り込みを行った輸入貨物の説明に及んだ時、出席者の一人が突然発言した。
「うちで目をつけている貨物だ。提案の対象にされては困る」
桜田は、何れ『口出しされては困ると』いう発言があると予想していた。
「この提案は、過去の密輸事件を調査して作成した。目をつけた理由を教えてもらいたい」
「密輸取締担当から入手したので、内容は話せない」
「なるほど、警察との繋がりがある部署からの情報ということか。しかし、情報管理官に通知されないレベルは個々人の情報そのものだ。恣意的な情報となる懸念がある」

そして、
「情報は共有化されて始めて生かされる。今日適正だからといって明日も同じとは限らない。慎重に対応すべきだ」
桜田は、慎重に話を進めた。
「警察情報は即効性がある。しかし一過性の対応で終わる。これに対して情報管理官は、常に流れ動く貨物から、どのような疑義を導きだすかに注力している。それは、通関業務担当が白や黒と判断するための有効な情報だ。これが通関業務のフォローに繋がる」
さらに、続けた。
「言い方を変えれば、水面下の見えない存在を知らせることだ。皆さんが、日頃の意識しない部分を意図的に意識させることで、ただ単に情報を整理して流すことではない」
と熱く語りかけたのだ。
暫く続いた静寂を打消すような発言があった。
担当統括官が休暇のため代理出席した上席官が、
「私のところにも密輸取締担当から入手した情報があります」
と話し始めたのだ。そして、
「密輸者は狡猾だ。情報管理官の下で情報を共有すれば、この点を線から面に展開して合理的に勝負できる体制がつくれるのではないでしょうか」
思わぬ発言だった。

沖縄の地域社会は、人と人の繋がりが強い。そのことを必要以上に評価する先輩や上司がいることを危惧していたが、一方では、組織で対処する重要性は、十分に理解され浸透されていたのだ。

組織的な密輸を想定したパターンや、そのスキームに該当する貨物を一定期間監視してみてはどうか。など様々なアイディアも出てくるようになり、この通関業務担当との会議も上手く回るようになっていた。一年を経ていた。

また、この取り組みに興味を持つ職員も表れていた。

「密輸を企む者にとって一番嫌がるのは税関の検査だ。彼らは、必ず税関検査を免れようとする。税関の仕組みや申告時期のタイミングも考えてくる。今回の提案以外に第二、第三の提案を行う為にも沢山のアイディアが必要だ」

桜田は、意識的に若手職員を中心に声を掛け、仕事は組織で行う事の重要性を語り続けた。人と人の繋がりに偏ると公平さを保てないばかりか、様々な問題を誘発しかねない。沖縄固有のルールがあっても良いとする先輩もいるが、そういったローカル・ルールでは、国際化というバケモノには対処できない。弱いところは、いっきに破壊され取り返しのつかない結果を招くからだ。

金城係官と花城係官にも語り続けた。

『密輸を企てる者には、島嶼という沖縄の地理的優位性は大きな魅力だ。そのことは君らがよ

り深く理解している。君たちならどんな密輸を考えるか、どうしたら阻止できるのか』

既に十八ヵ月が経過していた。

五.理解した取組み

税関は、国境で「物」の出入を管理し、課税し、そして取締りを行う行政機関だが、この「物」を管理する「者」に着目すれば、取締りという観点では効率的な取組みが可能だ。この「者」とは、つまり輸出入者でありその多くが企業ということだ。

税関の最大の関心事は、不正な輸出入や脱税の阻止だ。企業は必ずしも不正な部分だけを見ているのではない。利益も追求するが、社会的には様々なリスクに対する責任も併せて持っている。例えば、不良商品や従業員のセクハラ、財務上のリスク等に対して、それぞれ適切に対応しなければならないのだ。

当然のことだが、これらに対して一生懸命に取組む企業もあれば、これとは対照的な暴力団のフロント企業のように全く無関心なところもある。

つまり、社会的な責任を果せる企業は、税関とも不正輸出入や脱税を防ぐという点では利害が一致する。だからこそ「者」への着目では、こうした考えがあってもよいのだ。もちろん、関係部門の理解と協力があってのことだ。

桜田は、車のトランクに釣竿を入れ、名も知らない漁港で釣り糸を垂らすのが好きだった。もちろん、目当ての魚などないのだが、静かな海面と暖かな日差しに包まれるのが心地よかっ

たからだ。釣りの後は、東から西に抜ける山道をドライブするのも楽しみだった。そんな時だった。突然、迷彩服を着た数人の兵隊とすれ違ったことがある。一瞬、びっくりして身構えた。完全装備の兵隊で、顔には真っ黒な墨が染め塗られていた。

平和で小さな島、沖縄。しかし、もう一つの顔は、日本に駐留する米軍の基地が集中する島だ。密輸リスクの枠組みには、この米軍を意識したものも組み入れた。軍人及び軍属（家族等）は、条約の規定によって税関手続きが免除される。そういう盲点をついた薬物密輸を意識したからだ。彼らが集まるエリアや過去に問題を起こしたキャンプ地などを絞り込んだが、沖縄は地理的に狭く基地とは全く関係ない地域であっても除外することは出来ず困難を極めた。

しかし、一人二人と理解者が現れ、興味を示す若い職員らの協力を得られ易くなっていた。やがてピンポイントとはいかないが解決する力になったのだ。

こうして地域と輸出入貨物に関するリストが完成した。横浜税関に戻る二ヶ月前だった。

沖縄には、模合に象徴されるように仲間意識を強く結びつける地域性がある。作成したリストの中に『なんらかの不都合』な事が含まれるのではないか等との懸念もあったが、まったくの杞憂だった。

この考え方は継続され、より緻密な調査の下で強力な『ブラック・リスト』化が図られていたのだ。

## 第三章　黒潮に乗って

桜田の机上の電話が鳴った。そして、懐かしい声が受話器から響いた。沖縄地区税関の宮里情報管理官からだ。

「桜田さん、ご無沙汰です。宮里です」

宮里情報管理官は、会議の正式メンバーではなかったが、いつもオブザーバとして出席していた。桜田の後任が彼だと知った時は驚いたが、今迄の経緯や取組みを深く把握していた一人だ。その彼から二か月半ぶりに連絡があったのだ。

「おう、久しぶり。元気か」

「桜田さん、不審な漁船が石垣港に入港したんです。ヒットしました」

天候の関係で出港出来ず石垣港に留まっている漁船のことだった。乗組員にブラック・リスト化したフロント企業『㈱譜久原商事』の社員山田が乗船していたのだ。

まもなく乗船名簿が届いた。その中に確かに見覚えのある会社名が記載されていた。

食料品を輸入している会社の社員が、業務と全く関係のない漁船になぜ乗船していたのか。

この漁船は、神奈川県三崎港が母港だ。そして、修理が終わりしだい出港するが、漁をした痕跡がないと石垣税関からも情報が寄せられており、出港まで厳重な監視体制が敷かれているとのことであった。

宮里情報管理官との電話が終わり、程なくして密輸取締担当の審理官から、

「近々三崎港に入港する漁船が大量の覚醒剤を運んでくる」

という話が持ち込まれた。税関の審理官は関税法違反事件の捜査担当の職員だ。桜田は宮里情報管理官からの連絡内容と同一ではないかと考え、審理官に、

「先ほど、沖縄地区税関の情報管理官から、石垣港に修理目的で入港した漁船の乗組員にフロント企業の社員がいる」

との連絡があり、その社員が携帯電話でしきりに連絡をとっている様子や船長に指示を出すなどの他、漁を行った様子がないこと等の内容を伝えた。

沖縄と神奈川の点と点が今にも切れそうな線で結び付いたのだ。間もなく、密輸取締担当の小林統括官が飛んできた。

「久しぶり。元気か」

鼻っぱしが強くがっしりとした体形は、一見してヤクザである。後ろには、子分風の部下が二人ついていた。正直、こういうタイプは苦手だ。

「相変わらずデカイ態度だね」

「漁船の件だよ。お互い情報を持っているようだし、協力して取り組みたい」

「沖縄地区税関からは、フロント企業に所属する社員の通報があった。追って情報は共有する」

「それでいい。再度、宮里情報管理官が話した内容を聞きたい」

と言って、先ほどの審理官から聴取されることになった。

小林統括官は傍で聞いているのみだが、その眼つきの鋭さは正に非言語情報そのものだ。桜田は、過去の経験から大きな事件へ発展するとの予感を確信した。

第四章　静から動へ

漁船が石垣港を出港した。

三崎港には三日後には到着するが、この漁船で密輸が行われるのか。あるいは、洋上で他の船舶と接触するのか。

木曜の午前七時、漁船が予定通り三崎港に入港した。

入港後、直ちに、税関と海上保安庁による合同検査が実施された。二時間を越える検査にも係わらず何も発見されていなかった。

間もなく午前十時になろうとしていた。

桜田は、検査責任者として乗船した小林統括官に連絡を入れた。

「不審点はないのか」

「何もない。漁具を使用していない理由も聴取したが、エンジンが不調との説明だ」

「どこか改造された箇所とか、そういったところはないのか」

「我々は積荷中心の検査を行った。改造箇所までは確認していない」

「もう一度、ペイントや溶接等の痕跡をチェックすべきだ。そこまでやるのが検査だ」

小林統括官の興奮した声が響いた。

「おまえ、俺に指示するつもりか。何様のつもりだ」

と言うなり電話が切れた。

その直後、検査官から小林統括官に報告があがった。
「救命ボートの床に改造した痕跡を確認。塗装も最近塗ったように真新しい。船艇を叩くと、空洞の部分と明らかに何か詰まっている部分が反響音で識別できた」
しかし、確認するには該当箇所の破壊が必要だ。破壊するには相手の承諾が必要となる。場合によっては令状も必要だ。そうなると現場だけでの対応は困難だ。
小林統括官は検査官に救命ボートのサイズを質問した。
「長さが四メートル、幅一・七メートル」
船長に対しては、残された改造痕が通常あり得ない個所であることから引き続き税関の大型X線検査装置による検査実施を告知した。
一瞬だが、船長の顔から血の気が失せたのが見て取れた。
他の乗組員も、同様に血の気を無くし、体を小刻みに震わす者もいた。ただ、㈱譜久原商事の社員山田だけは、平然とした態度だ。
その彼が、
「税関がそこまで検査する権限があるのか」
と冷静な質問を投げかけてきた。
小林統括官は、船長らの挙動から何かを感じ取っていた。
そして、図太い声が響いた。
「なぜ改造したのか、床と船底の空間に何らかの物が詰まっているが、それが何かを説明して

もらいたい」

すでに乗組員のほか船長までが小刻みに体を震わしている。小林統括官の話の途中から、山田の顔からも血の気が失せつつあった。大型X線検査装置の能力を熟知する者であればこそ、無意識の内に体が震え、顔から血の気が失せる表情が現れたのだ。

突然、小林統括官が船長に向かって大声を上げた。

「中味は何だ」

一瞬凍りついた船長の首が微かに上下した。

それを見た山田は、錯乱したように船長に殴りかかったが、その場で海上保安官に取り押さえられた。

## 第五章　大型X線検査装置の検査

税関の大きな使命の一つは、不正薬物やけん銃、盗難車両の不正輸出入等を水際で阻止することだ。

横浜税関に導入されている大型X線検査装置は、桜田が所管する検査機器の一つだ。

この装置は、海上コンテナの他、トラックや乗用車もそのまま検査することができる。横浜税関が全国に先駆けてが導入した装置で、今までに、けん銃や自動小銃、覚醒剤、盗難車両などを摘発していた。

桜田に小林統括官から電話が入った。

「大型X線検査装置で検査して貰いたい。物は救命ボートだ」
「了解。優先して検査できるよう手配しておく」
大型X線検査装置による検査結果は、直ぐに出た。
覚醒剤らしき風袋とけん銃や実弾らしきものが整然と隠匿されている画像が解析官のディスプレイに映し出された。素人目にも明白だ。
しかし、主任解析官がうわ言のように呟いた。
「隠匿スペースに較べ、物が少な過ぎる」
桜田は、漁船の検査が始まる頃、宮里情報管理官から『漁船は他の船舶との接触はなかった』と報告を受けていた。
また、漁船には、通常の船には設置しないタイプのアマチュア無線機やノートパソコン、GPSが操舵室に設置されていた。

第六章　密輸犯捕捉に向けて

終業時間直前に小林統括官から桜田に電話が入った。
「沖縄に行ってもらいたい。上司の了解も得た」
間もなく、明日朝一番の沖縄行きチケットと資料が届いた。これから小林統括官の部下木村審理官と打合せとなるが、その資料も一緒に入っていた。
木村審理官が約束の一七時より二十分も遅れてやってきた。彼ら密輸取締担当の審理官は、はっ

きり言って礼儀しらずだ。
「打合せをお願いします」
遅れて済みませんと一言あるだろうにと思いながらも、
「始めましょう」
と応じてしまった。大好きな沖縄に二ヵ月半ぶりに行ける喜びに負けていたのだ。
木村審理官の説明が始まった。
要約すると次の様な内容だ。
船長の供述から、㈱譜久原商事は恒常的に何らかの事件に絡んでいる疑いが生じた。このため沖縄地区税関もマークはしているが、横浜税関も沖縄で調査を行うことになった。また、当該会社は沖縄の暴力団『渡嘉敷組』との関連があり、最近、神奈川県所在の元組長と手打ちを済ませた。元組長は表向き引退したということだが、かつて関東を傘下にしていた広域暴力団と謀議し大量の覚醒剤やけん銃を捌いたとの噂がある要注意人物だ。
なお、元組長の愛人は、横浜に本社のある某有名旅行社の社員で、この会社は、石垣島所在の㈱譜久原商事傘下の観光会社と代理店契約を一年程前に締結していた。
「沖縄地区税関に調査依頼しても可能な事例ではないのか」
「地区税関審理官の面が割れているだろうから、共同で調査することになった」
「調査だけなら、私の部下を出してもいいが」
「沖縄に詳しい人材が必要なので」

本当に生意気な口を利く野郎だ。人を人と思っているのだろうか。

また、木村審理官は、公務員とは思えない体格だ。身長百八十センチメートルを超え、体重も百キログラムは下るまい。言葉使いも着ている服のセンスもなっていない。こいつと一緒に行動だなんて気が重くなるのも当然だ。

羽田から那覇までは飛行機で二時間半。朝一番の便だから那覇には九時半には到着する。昨夜、検査部門の有志が出張祝いだということで、深夜まで杯を交わしたため寝不足気味だ。桜田は、ゆっくり休むことを考え搭乗手続きを先に済ませていた。

そこに突然木村審理官が現れた。紺色の背広にサングラスという出立だ。ヘビに睨まれたカエルの心境も理解できるというものだ。

「おはよう。まるで悪役俳優だね」

「おはようございます。嫁さんが厳しくて、どうしようもなかったんです」

と言って、手提げ袋には、いつものジーンズを入れてきたとの説明だ。こいつに嫁さんがいたのか。確か税関に入って十年とか言っていたから三十二～三歳か。何故だか仕事の時に見せていた厳つい顔とは違って、すごく温和なイメージだ。

「カカア天下は幸せというから羨ましいね。子供はいるのか」

「二ヶ月になる女の子。すごくかわいいですよ」

「そうか。沖縄で良いお土産品を買わないとね」

「そうですね。でも、仕事も完結させないと」
と言って、資料の入ったアタッシュケースをたたいた。おそらく飛行機の中では、休めそうも無い。一本とられた気分だ。
今日は金曜日だというのに九月末ともなると旅行者も少ない。三人掛けのシートに二人で座った。前後の座席は空席だし、半分程度は空席ではないだろうか。
シートベルトのサインが消えると同時に木村審理官がアタッシュケースから資料を取出した。不安が的中だ。急に二日酔いの症状が出てしまった。
「何だか気持ちが悪い」
「隣まで臭いますよ。でも、仕事は仕事ですから、再度概要を確認してください」
といって資料を手渡された。
資料で目を引いたのは、㈱譜久原商事の社員細田だ。漁船に乗っていた社員山田とは親戚だったのだ。また、琉球大学で電子物理学専攻の修士課程を終え、特にパソコンや電子機器にも精通し、趣味は釣りとまで調べてあった。
「よく調べたものだ」
桜田は思わず口走った。
資料には、さらに㈱譜久原商事傘下の観光代理店が元組長の愛人を介して結んだ契約の事なども記載されていた。
小林統括官は、さらに何を調べるつもりなのか。

漁船に積載されていた救命ボートには、覚醒剤が約百キログラムとけん銃二十五丁のほか実包も多数発見された。しかし、隠匿スペースの状況から、この倍以上の物を収納できる容量があったのだ。

そこに入るべき物はどこなのか。その残りがあるのか。これから入ってくるのか。

桜田は、この調査出張が単なる調査で終わるはずがなく、その確信に迫る調査であることを強く感じていた。

桜田は、木村審理官に、

「小林統括官の指示を正直に話してくれないか」

「昨日、説明したとおりです」

木村審理官は、昨夜、小林統括官統括官から受けた指示を思い出していた。

第一船は、回収に成功したが予期せぬ機関故障で石垣港に寄港。なぜ、週末なのか。それは、観光と関連していた。釣や離島へは週末を利用する観光客も多いから、それに紛れ込むことにしたのだ。

不審漁船に搭載されたGPSは、その航跡が抹消されていたがアマチュア無線に接続されたノートパソコンにはログファイルが残っており、システム上で動作したソフトの一覧が確認できた。洋上でインターネットを利用して黒潮に乗って流された覚醒剤の所在確認をしていたと推定された。オフラインでインターネットを起動すると、なんら支障なく位置や時刻が表示されたのだ。

また、その内容には、投棄されたポイントと回収箇所も示されていた。

不審漁船の他に、さらにもう一隻が動いていたのか、あるいはこれから動くのか。明らかなのは、㈱譜久原商事の関与と、さらにもう一隻の存在を否定できないことにあった。

八重山方面の天候は、先週末は台風が接近して荒天だったが、その前の週は天候に恵まれ絶好の行楽日和だった。気象情報では今週末も天候に恵まれる予報だ。

漁船での回収は成功した。次は、この週末に実施するかもしれないのだ。そう理解した小林統括官は、沖縄を熟知する桜田統括官を木村審理官と共に向かわせたのだ。調査だけなら沖縄地区税関に依頼すればよいが、この週末に密輸が行われるという切迫した状況を考えてのことだ。

そして、木村審理官に次のように指示していた。

「沖縄地区税関が㈱譜久原商事を『ブラック・リスト』化したのは桜田の影響だ。彼の元部下には、海上保安庁へ出向した者もいるから税関との連携もスムーズだ。私は、㈱譜久原商事の細田に銃砲密輸を行う情報があり、県警銃器対策担当と動くが、このことは伏せておけ」

桜田は、再び木村審理官に小声で呟いた。

「チームとして、互いに知るべき事は共有すべきだ」

木村審理官の表情には苦悶が表出し、非言語情報が満載であることを桜田は既に読み取っていた。

そして、木村審理官は小声で

「摘発です」

と呟いた。

## 第七章　密輸取締担当の対応

ほぼ定刻通り那覇空港に到着した。むっとするような湿気を伴った空気が体中にまとわりついた。既に木村審理官は、上着を脱いで手持し、額からは大粒の汗が流れ落ちていた。

ロビーに出ると、沖縄地区税関の密輸取締担当が出迎えに来ていた。挨拶をしているその時、遠くから誰かを呼ぶ声がしたように思った。

「桜田さん…。桜田さん…」

木村審理官が、訝しげに、

「誰ですか、あいつは」

と聞いてきた。

桜田には懐かしい宮里情報管理官だ。

「桜田さん、お待ちしていました。密輸取締担当が教えてくれないから、横浜の検査担当に聞いて、今朝一番の飛行機と判りました」

「いやぁ～、ご無沙汰だね。今回は密輸取締担当のお手伝いだから連絡しなかった。申し訳無い」

「今日の予定は、どうなっていますか。時間があれば夕食でも如何でしょうか」

木村審理官は、目配せで急げとせかしている。

「これから会議なんだよ」

「判りました」

といってメモを手渡してきた。

メモには、すでに飲み会の場所が記載されていた。
“桜田さん　久し振りです。今夜は、いつもの『フーズ・ハウス』です。昔の面子も揃いますので、来るときは『連絡しない』でください。宮里”
『フーズ・ハウス』は浦添にある桜田行きつけのスナックだ。
桜田は、即答した。
「今日は忙しいので『連絡しないよ』」
木村審理官がニヤリとした。
もちろん宮里情報管理官も微笑んだ。
『連絡しない』が参加の返事だ。楽しい沖縄の晩が待ち遠しい。

那覇港湾合同庁舎にある沖縄地区税関には、那覇空港から泊大橋を渡って二十分ほどだ。白い砂浜とコバルト色の海を左に見ながら、あっという間に到着した。
直ぐ会議室に通され、会議が始まった。
内容は、㈱譜久原商事に係る現況だが、しかし、どうも肝心なところを省略したなおざりな説明だ。
沖縄の密輸取締担当は、木村審理官とは話しをするが、一方、桜田を避けるような態度で、まったく顔を合わせようとしない。
こんな時は、間髪入れずの突っ込みが一番と考えた桜田は、

「木村審理官からレクチャーを受けた内容は承知している。㈱普久原商事は食料品を扱う輸入者だが、一般貨物の対応について情報管理官とはどんな協議をしたのか」
桜田の質問に、説明担当がすっかり固まってしまった。
木村審理官がフォローを入れてきた。
「今回の密輸は、外洋で瀬取りすることを想定しています」
瀬どりは、密輸品の受渡しを外洋で行うから取締機関の摘発を逃れやすいため、よく行われる手法だ。
「密輸は様々な方法で行われるが、なぜ瀬どりと考えたのか。海上保安庁が洋上で回収した覚醒剤と、三崎港に入港した漁船から摘発した覚醒剤とけん銃の事例を考えれば、瀬どりという手法であったと容易に推測は可能だ。しかし、通常の貿易に見せかけた密輸ではないと誰が判断したのか、また、その理由を聞きたい」
「・・・」
今度は、木村審理官も含め誰も答えようとしなかった。
「一般貨物に対する対応振りを聞きたいので、今すぐ情報管理官を呼んで貰いたい」
「この会議は密輸取締担当の会議であり、それは出来ません」
「一般貨物の場合は密輸取締の対象にしないということか。納得いかない。私が連絡する」
と桜田は、宮里情報管理官に連絡を入れた。
「桜田だ。直ぐに密輸取締担当の会議室まで来てくれ」

桜田は、さらに、
「検査担当の責任者が一緒だと、なにか都合でも悪いのか」
木村審理官が重い口を開いた。
「統括官の指示もあって話せません」
「仕事仲間を信頼できないなんて恥ずかしい。この場で小林統括官に直接確認する」
と言って再び携帯電話を取り出した。
「直接確認するのは止めてください」
木村審理官が必死に静止してきた。
「では理由を説明する責任があるのではないのか」
会議の雰囲気は息も出来ない程の緊張状態だ。
間もなく、宮里情報管理官が会議室に来た。
「丁度良かった。宮里情報管理官にも一緒に聞いて欲しい」
木村審理官に説明を促した。
「・・・」
しかし、木村審理官は、けん銃密輸情報の該当者が㈱譜久原商事の細田であることを話すことは無かった。
桜田は、密輸取締担当は『外洋で直接密輸品を受渡しする瀬どりで行う』との考えを説明し、宮里情報管理官に同社が輸入する貨物の対応振りについて説明を求めた。

「通関業務担当は、漁船に㈱普久原商事の社員が乗船している事実を確認した以降、同社の貨物に対する検査を強化することにした。なお、最初の貨物が、本日午前九時に到着し、現在、保税地域に搬入作業が行われている。また、貨物船の積荷目録には自動車部品と申告されており、食料品を扱う同社には珍しい貨物との認識だ。このため十一時から検査打合せ会議を行うことにしている」

「検査はどの時点で行うのか」

「保税地域に全て搬入された時点で開始します」

保税地域は、輸出入貨物の税関手続きを行うための場所として、税関長が許可をした場所だ。そのため人の出入や貨物管理は他の場所よりも厳格に行われている。

桜田は密輸取締担当に質問を向けた。

「一般貨物に対して、取締はどうするつもりなのか」

密輸取締担当の審理官が、

「我々は細田に絞っている」

「ということは、貨物対応はしないということか」

「・・・」

「いつも食料品を扱う会社が自動車部品を輸入することに、なぜ疑問が生じないのか理解できない」

「・・・」

「銃砲密輸の情報をどこで入手したのか判らないが、差し迫ったリスクに対しては現状で判断すべきではないのか」
「・・・」
と矢継ぎ早に質問した。
「特に話がないようであれば、十一時からの通関業務担当の会議に出たいので、打合せはこれで終わりましょう」
三十分も係らなかった。桜田が打ち切りを宣言したのだ。

第八章　通関業務担当の対応

あと十分で十一時だ。検査打合せ会議の時間も迫っており、桜田は宮里情報管理官の案内で会議室に向かった。
そこには、懐かしい面々がいた。
いつも苦虫を潰したような表情でいた古参統括官が、
「ご無沙汰しています」
と挨拶をしてきた。
その統括官が、今日の会議を進行すると聞いて驚いた。
「大丈夫なのか」
すると、宮里情報管理官が、

「変わりましたよ。桜田さんが始めた会議も、今では彼が中心的な役割を担っています。私も、気を抜くと追い出されそうなので下準備が大変です。それにしても大先輩のノウハウは凄い。税率適用に重要な品目分類や法令確認の方法など、若手職員にいい刺激を与えています」

出席者全員が着席するのを見届けると、古参統括官の進行で始まった。時計を見ると十一時五分前だ。

「それでは、検査体制について最終確認を行う。今日は密輸取締担当への応援で桜田さんが来ているので、桜田、一言お願いしたい」

突然の指名に驚いた。桜田は、今日来た理由を全て話した。

「みなさん、ご無沙汰しています」

そして、続けた。「石垣港にエンジン・トラブルで寄港した漁船が、昨日、三崎港に入港した。税関と海上保安部による合同船内検査で、救命ボートの底部に改造した痕跡を発見した。打鍵検査で何か詰まっていることが判ったことから、大型X線検査装置で検査し、けん銃や実包、覚醒剤を発見した。問題は、みなさんが心血を注いでブラック・リスト化した㈱普久原商事の社員が漁船員として乗船していたことだ。同社は明らかにけん銃や覚醒剤の密輸に絡んでいる。なお、密輸取締担当は同社の動向を県警と合同で監視すると聞いている。以上だ」

「桜田、ありがとう」

古参統括官が、検査対象貨物の説明を次のように始めた。

「日頃、食料品を扱っている会社が自動車部品の輸入だ。昨日は、同社の社員が乗船した漁船からけん銃などが発見された。現在同社の貨物は保税管理下にあり検査開始まで誰にも接触させないことにした。本日の検査は十四時開始とし体制は別紙のとおりだ」
と言って、その説明資料を出席者に配布した。そして、
「それぞれ担当割を確認すること。記録班は写真撮影、貨物開披班員は検査場警備、連絡担当は関係機関との調整、それぞれ兼務でお願いする。特に検査場には関係者以外誰も入れるな」
「検査場警備担当ですが、県警や密輸取締担当が来たらどうしますか」
「第三者の立入は認めない。宮里情報管理官、それでいいな」
「もちろんです。県警でも立入は認めない」
「質問が無ければ、打合せは以上だ。なお、この会議内容はいつもと同様に検査終了までマル秘扱いだ。誰にも口外するな」
「判りました」
誰彼となく返事があった。

「桜田、宮里情報管理官と一緒に昼食は如何ですか」
古参統括官から誘いを受けた。
「いいですね。お願いします」
昼食は既に準備していたようだ。会議出席者が退席すると三人分の弁当が運び込まれた。

「では、頂きましょう」
と古参統括官の声掛けで弁当を開けた。
良く食べていた仕出し弁当で、今日のおかずはナーベラの味噌煮だ。桜田は、当初こそ好きになれなかったが、今では、ゴーヤーやとうがんと同じくらいに好きな食べ物だ。
桜田が口を開いた。
「ところで、今回の貨物をどう思いますか」
古参統括官が、検査はX線車も使用して全量検査をするから、社会悪物品のけん銃や覚醒剤が見つかるだろうと話し始めた。
そして、
「今日出席したメンバーの目の色をみましたか」
と桜田に問い返した。
「みんな自信に溢れている」
と感じたことを伝え、この二ヵ月半の変化に驚いたことを率直に話した。そして、
「仕事は段取り八分、午後の検査は完璧ですね」
と向けると、
「そう考えている。しっかりと実施して結果を残したい」
そして、
「桜田さんと会議を始めた頃が懐かしい。手厳しいことを随分と言われたものだ」

桜田が答えに窮していると宮里情報管理官が、
「毎回、新しい提案をするため、桜田さんの部下は大変でした」
と笑って話し始めた。
「結局、あれがあったから今に繋がったと」
桜田が、
「よく居酒屋でも議論してその度に二日酔い。でも泡盛は嫌いになれなかった」
と続けると、古参統括官が、
「私は、一度も誘って貰えなかったが…」
宮里情報管理官が、
「桜田さんは大先輩が苦手でした」
続けて、
「今夜、フーズ・ハウスで飲み会を開きます。行きましょう」と声を掛けた。
桜田も、
「ぜひご一緒に」
と誘うと、古参統括官の顔が心なしか微笑んだ。
そのころ保税地域管理者から通関業務担当へ『荷主の㈱譜久原商事から引取りを急ぐとの理由で頻繁に貨物動静の問い合わせがある』、『倉庫に搬入された貨物の中に不審なマークが付されている』などの通報が寄せられていた。

丁度昼食を終えた頃、担当官から宮里情報管理官にこれらの内容が伝えられると、傍らで聞いていた古参統括官が、

「検査場警備担当を直ぐ出発させる」

と告げて会議室を後にした。

丁度その時、桜田の携帯が鳴った。木村審理官からだ。

「どうした」

「昼食がお済でしたら、㈱普久原商事の張込みに出ます」

桜田は、宮里情報管理官にそのことを告げて会議室を後にした。

終章

桜田は、木村審理官と㈱普久原商事の張込みに出かけた。運転は木村審理官だ。沖縄は不案内だと言いつつも地図が頭に入っているようなハンドル捌きで、小禄にある張込みポイントまで三十分程で到着した。

間もなく木村審理官の携帯が鳴った。

「通関業務担当による貨物検査で、けん銃が発見された」

㈱譜久原商事の貨物はダンボール四百箱のうち十六箱に識別の為か×印のマークが付されていた。そのダンボール箱には銃座に☆印が付されたトカレフタイプのけん銃が二丁ずつ隠匿され合計で三十二丁発見されたのだ。

密輸取締担当から一報だが、木村審理官が怪訝な表情をしていた。
桜田が、
「どうした。結果が出たじゃないか」
「そうなのですが・・・」
木村審理官は、小林統括官が一般貨物のことには一切触れていないことに気が付いていた。これとは違う物を追っているのではないか、或いは、これと並行して別の密輸が行われているのではないか、と考えていたのだ。
桜田も同様に、小林統括官が薬物・銃器担当官であるから、差し迫った大きな密輸が行われていると確信していた。

車の時計は、金曜日十四時五十分を表示していた。

（終）

沼田　健次郎（ぬまた　けんじろう）／沖縄大学・現代沖縄研究科修士二年

# 詩部門

詩部門受賞作

# アニマルテーゼ

元澤　一樹

窓のサッシに転がる抜け殻を
ゴミと認識した後　ポイと捨ててしまう
それに戸惑いを覚える人間なんていないよな
そんな暇ないくらいに日々は忙しい
今日何匹の虫を殺したかなんて数えていないから分からない
とか言っておいて
最初から興味なんてなかった
ピラミッドの天辺に君臨する高知能生物である我々は
鈍感なふりして残酷さを隠すくらいには神様似
遺伝子の構造がほんの少し違っただけで
喰うものは喰われるものへと急降下

幸せと不幸せ　可と不可　善と悪　0と1
二元論でしか物事を考えられないなら
それはコンピュータと何ら変わりないな
革命のときを恐れなさすぎる
そのくせ退屈を窮屈に思う我ら愚かな人間様々だから
求愛行動の真似して隣人に殺意を抱く
今日は何人の人とすれ違ったか
今日は何匹の生き物を喰ったか
鼓動は正常なのに頭は異常
哲学書読みながら自慰に狂って
愛の言葉を呟きながら射精する
頭でっかち異端アニマル
初めて女を抱いた夜
ベロベロに酔った神様が適当に作った不要の駄作
Wikipediaの制作者名簿からその名前が消えたのが何よりの証拠だ
アブノーマル世界線から繋がる
ケーブルテレビの有料チャンネルをごらん
神様の公開インタビューがやっているだろう

そこで「神様が今日何人の人間を殺したのか」の質問を受けている
キリスト・アッラー・仏様
みんな口をそろえて言っているぜ
「考えたこともなかった」

元澤 一樹（もとざわ かずき）／沖縄国際大学・総合文化学部日本文化学科二年

詩部門佳作

# 夏の色

仲間　陽香

目にこびりつくような青 緑 赤 白
沖縄の夏の色は痛いほどに
生きろ 生きろと
なぜ 急かす

どこまでも広がる海も
果てのない空も
夏の光を受け伸びる木々も
台風で腰を曲げたサトウキビも
熱い風に揺れるドレスのようなハイビスカスも
太陽に透かせば赤く脈打つ掌も

高く高く伸びていく雲も
打ち寄せては消えていく波も
今も昔も変わらないというのに

石碑の前に行儀よく備えられる紅白の薔薇は
岬からの海風に立ち向かう山百合よりも
美しいというのか
どの花にも
あのオオゴマダラは 飛んでいくというのに

震える手で 名をなぞり
か細い声で その名を呼ぶ
彼女を見つめることしかできない私に
沖縄の夏の色は 痛いほどに
生きろと急かす

目にこびりつくような青 緑 赤 白
沖縄の 夏の色は痛いほどに

# 生きろ 生きろと なぜ 急かす

仲間　陽香（なかま　はるか）／沖縄工業高等専門学校・メディア情報工学科四年

詩部門佳作

# 夜間非行

清水　元貴

人類という奇峰の頂を握する第一等の詩人は小林秀雄である、といった男を、いやプラトンだ、と女が反駁した。また別の男が　いや、シェイクスピアだ　といい、またまた別の女がバルザックだといった。チャップリンだといい、エノケンだといい、ジャック・レモンであるといい、立川談志であるといい・・・不思議なことに所謂まっとうな詩人の名は沙翁より出なかった。そこで己は小さな声で「オカハルオ」といってみた。聞き留めた耳は一つとしてなかった。

固より、己はいつでもそんな風に臆病だったわけではない。かつてHが、「言葉なんてものは、腹が減った、という程度の些事でさえ、他人事以上には成し得ない。いわんや思想においてをや、だ」としたり顔で御高説下さったのを、己は儼として容れなかったものだ。己は間違わなかった積りだが、奴の言い分にだって一分の理ぐらいはあったことを己も今では了解している。今では？　否。当時だって己には分かっていたはずだ。奴は正しい。しか

し奴は間違っている。と。

排中律に照らしてここに矛盾はない。要するに己が論難したのは奴の論理でなく、論理を言う口吻だった、という、ただそれだけのことだ。

問題は奴の論理の結果するものでない。結果したもののネガティヴでもない。己が攻撃したのは寧ろ奴の論理そのものを覆う論調のネガティヴだ。

人間とは貴きものである。人間はネガティヴをも撥溂と語ることが出来る。奴に欠けていたものはこれだ。この撥溂だ。奴は自分の論理の瑕瑾さえも愛するほどその完璧を信じていたかもしれないが、言葉という杖の魔力を決定するパラメータが、実は撥溂以外の何物でもない事を忘れていた。何故なら撥溂とは愛の謂いであるから。人間は自身愛していない何物を以ても他人を愛で感化することは出来ない。身を以て思惟しない何物をも人は言わぬが良い。

軽はずみな幸福を語るな。不幸を語るな。己は人間の弱さ、人間の限界が齎す苦痛を透かして幸福を見る。それ以外に何がある。目の前の卑近な現実という瘡蓋を剥がさずに、もっと己に親しい現実を見る術がどこにある？　親しい現実とは己の幸福の因って来たる場所である。同時に、不幸の因って来たる場所である。

詩人とは凡てかような国の子である。彼らはこの国の何物をも真に写す言葉を持たないが、熱情が、彼らに無謀な仕事をさせる。この愚昧を誰が嘲えるだろう。

夢を信じきれぬ者、それはこの国では異邦人である。「最低の詩人」でさえ、彼には遠い。しかし彼の位置に居るものには、いっぱしの文学青年を自ら任じている者さえ少なくないこ

とを忘れてはならぬ。自称する詩人、虚偽の詩人。それは・・・己だ。
だが。と己は抗う。己にだって、そういう自分自身を哀しむことくらいは赦されているはずだ。己は敢えて、虚偽の歌を歌う。

結い髪の寂しく見ゆる夕涼み

評言は聞くまい。分かりきっている。拙劣、三文児戯、路肩に流れ出したロマン主義のヤニの臭さ。常識。履歴書の記入例のような常識以外、この十七音十三文字の模様には見出されない。
しかし同時に、これは己の限界を表して仮借ない十七音十三文字だ。歌の尺度に測って虚偽のこの文字列は、己を述べては虚偽がない。
己は己の無才を厭い切れない。
詩歌は星よりも高く己を見下ろす。そして、己はこの薄汚い瘡っかきの現実の上で、異国からの光に導かれて歩くことをしかゆるされていない。
己はその哀れを厭い切れない。

清水　元貴（しみず　もとき）／琉球大学・理工学研究科博士前期課程一年

詩部門佳作

# 虚実面境

島袋　歩

のけものきたりて
は
てつほむら
まいて
うつろまなこ

ほむらおどりて
は
かがやかし
まいて
あまたくらう

ほむらすぎて
は
かげひかり
さいて
うつつもどりし

もりいわく
もとむは
いきるの
さがであり
とがである
くいてくい
くらわれくらわるは
さだめであり
とがめである
まわりまわるより
のがるるすべは
ただみがわるのみ

のけものくずれて
は
さざれみず
まいて
くれけずれし

みずまわりて
は
はなばなし
しいて
くれもどる

のけものきたりて
は
ゆかりつぎ
こいて
そのみかわる

島袋 歩（しまぶく あゆむ）／沖縄工業高等専門学校・情報通信システム工学科四年

詩部門佳作

# ドリームマップ

杉下　薫

とっぽっぽ　　とっぽっぽ
広がる宇宙　輝く星
ぴょうん　ぴょうん　ウサギが跳ねる
シャキ　シャキ　サラダを食べる
チワワが吠える
ちびっこの手から風船が飛んだ
ネコが転がる
ランドセルは開いていた
短冊がふわりと揺れる
ケーキ屋さんになりたい　甘いにおいが鼻をくすぐる
おりひめとひこぼしは出会う

つみきを高く並べて城をつくろう
とっぽっぽ　　とっぽぽ
青色に薄く白を足した空　ふわふわわたあめ型の雲
よいしょ　よいしょ　綱を引いて勝利を我が手に
セーラー服は甘酸っぱい　学ランはひかる
お弁当は冷たいけれどほんのり温かい
ボールが弧を描く　バットが空を切る
土を踏みしめる　熱風に包まれている
甲子園児はみせる
メリーゴーランドはまわる　まわり続けた
えんぴつと画用紙で世界地図を描こう

とっぽっぽ　　とっぽぽ
見てよ見てよと誘う海　リズムを刻むひまわり
らららら　まままま
宝くじは買われる　もしもの妄想はとまらない
目覚まし時計は起こさない
キャリアウーマンのスーツがはためく

自由って何だ　夢って何だ
作家は何を書く
四角い顔　三角おにぎり　おなか丸出し
歩いて戻って座り込む　止まって休んで走り出す
長いようで短くて　短いようで長いから
宝物は磨いて磨いて持ち続けよう
白だ黒だ緑だシルバーだ紫だ黄色だ赤だゴールドだ青だ
選択肢は無限大　　さあ　何色の絵の具で何を描こうか
　わたしたちのみらいはいろいろだ

杉下　薫（すぎした　かおる）／琉球大学・法文学部総合社会システム学科一年

詩部門佳作

# 窒息者のうた

長嶺　勝磨

道のはずれに日が沈むとき
誰も道をはずれた人の行方を知らなかった

焦雲が海上を渡るとき
潮騒が砂浜を歩くとき
立ち止まりたる我が心の帆
寄せては返す波際に腰の錨を下ろしたり

心の内の海底へ落ちてきたのは石だった
盤石な岬と化した日に君を動かせなくなった
凪を喜ぶ日々のうち二人を載せるべき舟の吃水線が低いことを

重力だけが知っていた
真直ぐな風が吹く場所で知らないふりをし続ける
渦巻いていた高鳴りに気付かないふりをし続ける
声にはっきりでていたが言葉にはしなかったものがあることを
斥力だけが知っていた
指差す行為を覚えるためにぴんと張られた水平線
漕ぎたいままに漕いだとき
誰も引き潮の行方を知らなかった

さざ波が続いていく先の
透明な空気の果てにあったのは
窒息しそうな嘘だった
パンドラの箱と偽って蔵し続けた片思い
数えきれない夏の日のたった一度の表情に
引き寄せられた恋の網と
君が名字を変えた日に
畳めなかった心の帆

弾けないよう胸座をなんとか掴んでいたけれど
震えないよう琴線をいくつか切っていたけれど
心の中の竪琴は一弦のみとなっていた
奇しくも最後の一弦は赤い生糸でできていた
涙の塩糸に絡まればきっと綻ぶものだけれど
紡ぎ終わった芭蕉布の如き確かさに触れていたかった
ただ仕合わせを祈りたい　かそけき歌を歌いたい
唇を寒くするだけの虚しい調べを口ずさむ
　咳をしながら。
　陰陰と。
　切切と。
　遅遅なるリズムで爪弾く。
ワッツの《希望》の絵のように悲しい韻（ひびき）に満ちていて
まさに盲目だったねと耳が知らせてくれていた
正しい調子の音の時
素直な響きの声の時
相思樹の花は風を受けうなづいているようだった
曇の空は錫色で、湛えきれないもの故に　冷たい雨を知っていた

朝の空は金色で、侵しきれないもの故に　気高き星を知っていた
愛しきれないもの故に　憎みきれないもの故に
調律しえない真心と
腐蝕していく眼差を
磨いたばかりの銅（あかがね）の夕空だけが知っていた

目を背けてきけ　周縁の輪舞曲を
目を伏せてきけ　存在のエコーを
目を閉じてきけ　不滅のソロを

鋭銀の風は知っていた　無数の叢の早緑を
刈り取る故に知っていた
鋼鉄の月は知っていた　無限の海の青墨を
盗み持つ故に知っていた
深く空気を吸ったとき
誰もため息の行方を知らなかった

生き抜く故に知らなかった
錨を揚げよ！錆びぬうちに。

長嶺　勝磨（ながみね　かつま）／沖縄県立芸術大学・美術工芸学部美術学科三年

# 選評

選評【小説部門】

## 第十回びぶりお文学賞　小説部門　講評
## 推敲することも書くことの一部である

大城　貞俊

今回の応募作品は十一編。いずれも書くことの意欲を感じさせる好ましい作品であった。作品の構成や着想にも新鮮な趣向や実験がなされているという印象を強く抱いた。

ただし、共通した欠点もいくつか見られた。その一つは、推敲を重ねれば防げる単純ミスが多かったことだ。主人公の名前が途中から変わったり、誤字脱字があったり、ワープロの変換ミスがあったり、年齢と時代が物語の進行と整合性がとれていなかったりなどのミスである。これらのミスをなくするためには、推敲することも書くことの一部だと考える意識を持つことだろう。

二つ目はやや独尊的であることによってリアリティを喪失していることが挙げられる。小説はフィクションであるとはいえ、細部にリアリティがないと感動や発見からほど遠い言葉遊びになってしまう。語り手をも客観視するもう一人の作者の目が欲しい。

昨年は受賞作を選べなかったが、今年は受賞作に「赤いまま」（竹澤さち）を選び、佳作に「密輪事件簿…密輸犯を絞り込め」（沼田健次郎）を選んだ。

受賞作の「赤いまま」は私にとってもイチオシの作品だった。「ナイチャー」と呼ばれる女子大学生の「私」探しの物語である。テーマは繰り返し用いられ作品化もされているが、本作の手法は斬新であり、広がりと深さを感じさせた。その一つは「故郷」の概念である。故郷とは自らが生まれた場所であるという自明な概念を壊し、私の生きかたをとおして「新しく故郷をつくる物語」として提示したことである。二つ目は、祖母の死を迎える「家族」をフィルターにして、私の居場所を広がりのあるテーマとして考えたことだ。そして三つめは登場人物のすべての名前を剥奪したことである。父母や祖父母などと人物の関係性のみを提示する方法は、固有名詞以前の普通名詞として孤立した個々の「私」探しの物語を暗示しているようにも思われるのだ。人物描写も風景描写もリアリティがあり他の作品より一歩抜きんでているように思われた。祖母の死に際しての骨上げのシーンも「私」をナイチャーとしての呪縛から解き放つ精神的な葛藤を象徴するシーンであり、病床に臥した祖母が赤いコーラを欲しがるシーンも、血縁や故郷に繋がるイメージを喚起する。このような作者を発見し応援することが、びぶりお文学賞の存在価値だとさえ思われた。

佳作の「密輸事件簿…密輸犯を絞り込め」はこれまでの応募作には見られなかったエンターテインメント性を有した作品である。沖縄を舞台にした作品は、沖縄を取り巻く歴史的、政治的な状況から倫理的な作品になりがちであるが、そこに風穴を開けた作品だ。登場人物の心理描写がやや弱くドラマのあらすじだけになった感は否めないが、作者の豊富な知識で展開される物語は、そのままテレビドラマの映像として浮かび上がらせるほどの言葉の力を感じた。この力は、題材を異にしても通用するであろう大きな期待を抱かせるものだ。

入選には至らなかったが、他の作品にも印象深い作品は多かった。私には特に「カラフル」が好ましかった。主人公の「私」を米国人とウチナーンチュのクオーターとして設定し、それも沖縄戦で女性をレイプして殺したという加害者の孫の視点から沖縄戦を考える作品展開は、ユニークである。デフォルメされたこの設定は小説でしか展開できないと思われる力強さがあった。また、レイプされた女性の姉の和解しない姿勢もよいし、戦争の認識に対する「私」の変容も嫌味がなくてよい。しかし、その他のことも含めてリアリティに乏しいという意見が大勢を占めて入選には至らなかった。

「拝啓　アメリアローズ様」は、起承転結があり、よくまとまっていた。基地内の少女アメリア十二歳と基地外の少年ハルキ十七歳の交流を描いたもので、届かない手紙と回想が交互に織りなされて作られる世界はファンタジックな世界としてよく描かれていた。

「サイコパスだって後悔する」は、性格異常者が自殺を決意するが、その前に自分の幼年時からの思い出を語るという設定で展開される作品だ。うまく構成され作られているのだが、やや展開に無理があるようにも思われた。死や異常性格を扱うには、もっと慎重であったほうがよい。

「個々の居場所」は、女子大生を主人公にしてテストや友人関係に悩む日々を素直に描いたものだ。「相貌失認症」の友人を登場させた人物設定はユニークだが、展開があまりにも素直すぎる。文学作品は素直でなくてもいい。受賞作も己の居場所探しの物語で本書に収載されるので比較して作品作りにいかして欲しい。

「白昼夢とコントラスト」は、とても観念的な作品で、弟を堤防から突き落とす私の白昼夢を

描いたものである。白昼夢とはいえ、弟を殺す行為の根拠は曖昧でやや不可解である。弟の死を送る葬送には沖縄の伝統的な慣習も取り入られているのだが、弟の死の向こう側に何を見出そうとしているのか。また弟のマブイを探すために海に潜り続ける私の行為が何を象徴しているのか、今一つ分かりづらかった。

「溺死した魚」も観念的な作品だ。作品のタイトルは、観念の海で溺死した俺たち（魚）を揶揄するものかと思われるほどだ。作品は「日蝕」で芥川賞を受賞した平野啓一郎ばりの文体で展開されるが、難解な語句はイメージを容易に結ばない。交わされる会話も「愛」や「文化」や「芸術」と拡散しすぎて焦点を結ばない。また小説は決して説明ではなく「ディベート」で展開される論戦でもないのだ。冒頭で「高原を殺す」と登場してくる女子大生の結末もいつの間にか霧散している。

他の応募作品「心の中に」「虹が嫌い」「透明な」も受賞に至るには今一歩の努力が必要である。「心の中に」は受賞作にするには枚数が三枚ではあまりにも少なすぎる。豊かなイメージを有した作品は散文詩や物語詩の分野で高く評価されるかもしれない。

「虹が嫌い」は、文学的資質を大いに感じさせられた。祖母アマネと私歩夢の物語が「手榴弾」をアイテムにして展開される。二人の物語のつながりの工夫と、二人が手榴弾を持ち続ける根拠をもう少し丁寧に描けば評価は高くなったのではないか。人名には変換ミスが目立った。推敲の際には留意をして欲しい。

「透明な」は、二人の幽霊を、突然静止した空間に登場させる作品だ。「正しく自殺した」とさ

れる大学生の「私」と、「正しく殺された」とされる自己主張の強い高校生の「少女」を登場させ、生きるという意味を小説の手法で考えようとした作品だ。しかし、「私」が元の世界へ帰れて「少女」が元の世界へ帰れないのはなぜなのか。その根拠がやや曖昧で説得力のある作品にはなっていないように思われた。

私たちにとって、生き続けることは大きな課題として目前に立ち塞がり日常を脅かす。この世界を作品世界で描き出そうとする若い諸君の真摯な姿勢には大いに共感する。いつの日かその努力が、きっと結実するはずだ。結実しなくても恥じることはない。そのプロセスに誇りをもって精進して欲しい。

（おおしろ　さだとし／外部選考委員・作家）

## びぶりお文学賞選評

**西森　和広**

各投稿作品についてコメントする。

「カラフル」は米軍人による暴行殺人をテーマに、犯人である祖父の贖罪の念を受け継ごうと

する孫娘を主人公に据えた意欲的な作品だ。最近の事件に触発されたものだろうが、本作は事件を過去の米軍統治下に起きたものに設定している。したがって時代背景の違いに十分な配慮が必要になるが、その点が少し弱い。例えば、当時この種の「犯罪」が果たして明らかにされただろうか。そういう問いがまず必要では。また各登場人物の設定、性格や言動にも、まず物語ありきの感が強い。

「サイコパスだって後悔する」は主人公の独白という形を取っているが、三人称の物語と読めなくもない。主人公の名前をはじめ、現実感が薄く、また曖昧なところも多い。全くの空想話とも見え、少々読むのが辛い。リアリズムを追及すればまた違った作品になったかもしれない。

学生の日常を描く「個々の居場所」は、エッセーのような素直な作品。出だしはややたどたどしいが、次第にこなれた文章になる。入院した友人がただの風邪だったという「落ち」だが、「ただの風邪」で附属病院に入院はないだろう。

「白昼夢とコントラスト」は、別の委員の方が指摘されていたように、タイトルでネタが割れてしまっている。個人的にはこの種の奇想は悪くないと思うが、筆力が要求されるところ。方言や独特の習俗には、まめに説明を入れるのが親切。

各部分を拾って読むと、「溺死した魚」はかなりよく書けている。ただ、様々な挿話が絡み合っていて、行く先がよく分からないまま終わるという印象だ。一つの物語に絞って書いてみてはどうだろう。

「赤いまま」の文章はしっかりしている。ただ語り手である若い女性の主観性の強い情緒に辟

易させられる面もある。それこそが著者の狙いなのかもしれない。彼女には、周囲の状況がすべて意に沿わないものと映る。実は父親は、自分のように自由に生きてほしいと望んでいるだけかもしれない。その父の気質を継いだか、兄と弟は随分勝手気ままに見える。それでもさほど縁が深かったわけでもない祖母の葬儀にはちゃんと顔を揃えている。次に三人集まるのは父か母の葬儀の時、などと兄はうそぶくが、どうだろうか。そもそも両親ともまだ若い。人生はこれからでは。実は盆や正月にはまめに帰省しているのでは。誰かの就職、結婚、子供の誕生、あるいは病気や事故、おそらく飛んで帰って来るのでは。彼女や兄弟たちが、世間を知り、社会を知り、人生を知るのは、まだこれからのはず。彼女にはそう声を掛けたくなる。最近の話題を取り入れてみたのだろうが、「ブラック・バイト」の挿話は無くて良いと思う。

「密輸事件…密輸犯を絞り込め」は、税関という仕事の実際を描く。相当に調べたものか、実にリアルに描かれている。後半、やや主人公の主観に流れそうになるところもあるが、ハードボイルド・タッチの三人称の文体で通しているのが爽快だ。「てにをは」の誤りが時々見られるなど、欠点もなくはないが、将来を期待させる。タイトルには工夫が欲しい。

「拝啓　アメリア・ローズ様」は、基地の軍人家族の問題というあまり扱われないテーマに挑んでいる。沖縄の地理や基地の実態等の記述にやや整合性に欠ける箇所が見られる。また英語の使用にはよくよく注意を払ってほしい。多用して感動が増すわけではないし、語法に誤りや違和感が少しでも認められれば、リアリティも失われる。主人公の高校生は英語が苦手という設定にしたのだから、別の書き方もあったと思う。

「心の中に」は、新聞記事の引用で締めくくるアイデア勝負のミニ・コント。同性同士の心中という結末に期待したほどのインパクトが感じられなかったのが残念。

「虹が嫌い」は、冒頭の沖縄戦の状況を伝える語り口の端正さが印象的。現代に話が移り、手榴弾を持つ主人公の女子学生が登場、「虹と口紅の伝説」といった道具立ても揃って、さてはと期待が高まる。しかし結局ストーカー撃退の話が出て、すっと終わってしまい、少々期待外れか（ストーカーとされる男子学生も、極めて異常で危険とまでは言い難く、手榴弾のインパクトからすれば役不足）。難しいだろうが、戦場の少女と主人公をつなぐ物語こそ掘り下げて欲しかった。

「透明な」は、自我の二重性、あるいは成長過程における葛藤の物語と読みたい。書きたい、だが、何をどう書けばよいのか、そういう苦悩が見えてくる。おそらく物語はそこから始まるはず。

最後に全体として気になる点を挙げて終わります。日常あまり使われないような漢字や言い回しを用いた表現がかなり見られます。全篇、そういうスタイルで通す、あるいは特定の場面や人物の性格付けのための意識的な使用であればまだ良いのですが、日常的な表現の続く中や、ことに若者の会話の中などに気まぐれのように登場するとかなりの違和感を覚えます。いかにもワープロ仕様という印象で、逆に拙く見えてしまいます。身に付いた言葉で書かれた文章は、慣れた服を着こなしている人と同様、好ましく見えます。もちろん、時には晴れ着も着るでしょう。それでもできるだけ自分に似合うものを選ぶのでは。それと登場人物の名前も気になります。大切な登場人物ほど大切に名前を付けたくなるでしょう。おそらくあれこれ考えると思います。ただ昨今の特徴的な命名法には気を付けてください。どういう読み方をするのか分からない漢字で書

かれた名前がよく出てきます。最後まで主人公の呼び名が分からないというのでは、物語に入りこむどころではありません。ルビを振る、読み方の分かるような場面を入れる、そういうひと工夫をしてください。また主人公がごく一般的な名前なのに、それほど重要でもない人物の名が変わっていたり、印象的だったりするというのも考えものです。誰に焦点が当てられているのか、名前はそういうヒントにもなるはずです。

（にしもり　かずひろ／法文学部教授）

## 沖縄の「問い」としての「何者か」

武藤　清吾

琉球大学に赴任して二回目の選考を担当した。昨年同様「自分たちは何者か」という「問い」が沖縄の人たちの心の底にあるのを感じる。出生地と違う言葉や生活習慣が自己の存在の意味を問うことはよくある。しかし、沖縄の場合は明らかにそれとは異質の「問い」が発せられている。それは沖縄の歴史に規定されたアイデンティティへの「問い」である。

入選作「赤いまま」は、その「問い」が最も鋭く提示されている。巧みな設定と構成で、沖縄

に生を受けた「私」の存在の意味を問う。「私」は沖縄に移住した父と沖縄の離島出身の母から生まれたものの、目、肌の色、体毛、体型など、「沖縄の子」である特徴を探せば全てが当てはまる、「沖縄の子」そのもの」の存在として表象されている。さらに、父親の血を引く身体的特徴を持つ兄と弟、母親の血を意識させる「私」という二項対立によって、血とは何かという「問い」を浮上させている。血の問題は、小学生の頃から無症候性血尿に悩んでいたことに端を発した「私」の内面の問題としても語られていく。父母の二種類の血による外的な身体形質による苦悩と、尿と血が分離して見える「二色の混濁」の幻覚すら覚える病理が描かれている。

血の問題の自覚と「問い」はいくつものエピソードで語られる。不慣れなアルバイト先で「ナイチャーの親から生まれたお前が、何故ナイチャーらしいことが出来ないのか」「汚い顔でもちゃんと笑え」と責任者に叱責され、挙げ句の果てに出勤を止められて再び膀胱の痛みに苦しむ。この痛みは「沖縄の子」でありながら「沖縄の子」を拒否されている苦悩であった。

二年前に祖母が入院して亡くなり、「問い」はさらに深くなる。祖母を見舞った「私」は、祖母が「私」に「沖縄の子だから可愛いね」と言ったこと、祖父母の家のシーサー、祖母が病床から発した「コーラ」という言葉に祖母のまなざす「沖縄の子」に戸惑う。父親も「日本と沖縄のハーフで顔も綺麗に生まれたんだから、血も混じるって素晴らしいことじゃないか」「沖縄の離島の人は血が濃いから病気の人も多いしね、血が混じって丈夫なんだから、自信持ちなよ」と「私」に不用意に語りかける。祖母が亡くなり骨を拾うとき、祖母の骨が私の身体の一部と感じる「私」の感覚に、「私」の内面のきしみを感じる。祖母が亡くなっても、祖母を意識すればするほど「沖

縄の子」と血をめぐる「問い」が「私」の身体内部で反芻されていくのである。

表題の「赤いまま」は、赤い血であり「赤いラベルのコーラ」なのであろう。「私」の「問い」は何も解決せずに物語は閉じる。新しい職場でも「姓と標準語に近い口調」から上司に「清廉なナイチャー」という「奇妙な名称」で呼ばれている挿話が入れられ、「誰かに説明されること以外に、私を説明する言葉を持っていない」と「私」は語る。そして物語は、通夜で生前の祖母を語った「いつも人のことばかりで、自分のことは後回し」というナレーションに対して、「違う、そうではない。祖母もまた……ではなかったか」と回想的に一人語りする場面で締め括られた。

人名は付けられず、福岡、沖縄という地名だけが浮き上がる構図は興味深い。それは「沖縄の子」と血をめぐる「問い」の普遍性を示唆している。「祖母もまた……ではなかったか」の「……」は読者の側に投げかけられた「問い」である。

佳作「密輸事件簿・・・密輸犯を絞り込め」は、税関の貨物検査統括官による密輸船取り締まりが描かれている。ストーリーも明瞭で、事件の核心に迫る面白さもある。最後には別の事件が示唆され続編があるかのような期待まで持たせる。税関の現場などもよく調査されていて説得力がある。海洋上の島の周囲で人知れず実行されている密輸とその対応に当たる人々の思いを描き、島国日本とは相似形にならないもうひとつの島国沖縄の存在の意味を問う構図となっている。アジアの物流の拠点としての沖縄で排他的経済水域内のパトロールをすることの持つ意味が、国家としての日本の中でどのように咀嚼されているのかという「問い」となっている。登場人物と語り手の視点とが混在する場面があり、内面心理の描写も弱く作品としての完成度が十分ではない。

また、テレビの推理ドラマのようなタイトルをあえて付けたのかもしれないが、小説としての題名としては内容を表象するものでありたい。

選外作も簡単に見ておきたい。「カラフル」は、退役米兵の祖父を持つ主人公が、祖父の犯した沖縄の女性に対する強姦殺人の意味を問う物語である。テーマは沖縄の現在を考える積極性を持つものの、これほど重大な事実を祖父の死まで知らなかったという設定には無理がある。「拝啓　アメリア・ローズ様」は、米軍基地の少女と沖縄の主人公との恋愛を手紙形式で描き、恋をする沖縄の私の苦悩の意味を問う。選考会で、文中の英語表記に多くの誤りがあるという指摘が出された。「個々の居場所」は、三人の男女がそれぞれ抱える精神的な事情を語りあうことで、孤独な状況を脱して居場所を見つけていくという内容である。三人が居場所の意味をどう受けとめたかを記述することが必要であった。「溺死した魚」は、殺人という観想を設定することで逆に「生きる」ことの意味を考えさせようとしている。意図は読めるものの、叙述が観念内の操作に終わり、「己たちは、溺死した魚だった」という主題が焦点化されていない。リアリティの意味を考えてほしい。「サイコパスだって後悔する」は、成長段階における障碍の発現を扱う。問題の所在は確認できても「生きるとは何か」という「問い」に応える世界が作られていない。読み手の心を動かす人物設定を工夫したい。「白昼夢とコントラスト」は、弟の不可解な死の真相を探る内容である。冒頭部分で死因が露見するので興味が半減する。緻密な設定を求めたい。

最後に今後の投稿への期待を述べておきたい。今回も応募数が少なかった。その中には推敲が不十分な作品や規定文字数の八割にも満たない作品が一定数あった。応募作の大半が締切直前の

投稿であったこととも関係があるであろう。投稿を希望する者は、早めの構想と執筆、十分な推敲に心を配ってほしい。書き手の一方的な思いではなく、読み手を意識した構成と表現が求められる。若い世代の奮起を期待している。

（むとう　せいご／教育学部教授）

## 選評【詩部門】

# 第十回びぶりお文学賞選評

松原　敏夫

言葉は誰もが使うもの。言葉でつながり、相手を言葉で理解し、自分を言葉で伝える。言葉はそんな役割のほかに、想像力や比喩を駆使して、言語世界を構築することにも使える。言葉が豊かになる、とは語彙が豊富ということではない。太陽は宇宙のダイヤモンド、月は夜空のひまわり、星はサファイアの花園……とか言い方を変える（比喩表現する）だけで、世界の物の見方やイメージが大きく変わる。詩的表現とは、既存の意味やイメージを変え世界を豊かにすることである。それに感情表現も豊かにできる。詩的表現を使うと、言葉が楽しくなる。こうしてできる詩的言語は読者に世界を新しい発見させ、感動させる。たかが言葉されど言葉なのである。

前回受賞作を出せなかったが、今回は、作品の完成度よりも、将来を期待できる、という視点に立って選んだ。今後も書いて欲しい、書くことの持続性を持っていると思う作品を念頭に改めて読みなおして選考したら、左記の結果になった。つまり、この作者は、なにか詩的な感覚を持っているなという匂いを強く感じさせる作品を選んだということだ。

**【受賞作】**

**「アニマルテーゼ」（元澤一樹・沖縄国際大学総合文化学部日本文化学科）**

作者は現代という時代に対する意識を持っている。その現代意識から発する言葉、世界のあり様を告発し描いている。作者は現代がアニマル（動物）化していると見ている。現代の人間の状況への辛辣な批判というか。生き物を殺める事への無感覚。コンピュータに依存した、実感のない世界。愛の不在。神への不信、疑義。この救いがたき世界。そういうことを、イロニー、諧謔、アナロジーを使って書いている。「鼓動は正常なのに頭は異常」。こんな言い方は、現代社会のゆがみへのメッセージ。つまりは普遍性が不在ということ。この不在感がどうこの先にいくか。そこは表現をとめて、余韻に預けている。読んでいて、作者はラップ感覚で書いているのかもしれない、と思った。

受賞作にしたのは詩に架ける作者の現代精神がよくでているからだ。技法云々ではない。現代詩にとって、こういう世界の現実の姿への関心をもって、自分の言葉を投げかける行為が必要である。ただし、詩にはポエジー感覚が必要であることを忘れてはいけない。

**【佳作】**

**「ドリームマップ」（杉下薫・琉球大学法文学部総合社会システム学科）**

詩句と行のテンポがよい。テンポがよいのは作者の言語感性からくるのだろう。多彩なオノマトペで言葉を呼び込んで、次にイメージを自在に出しているから、詩的空間が広がっている。内

容的には軽い。オノマトペを多用すると、鼻につくこともあるが、この作品の場合、適当な場所に使われている。行が次の行を生み出す、うまさがある。言葉のリズムの使いかたにはいいものがある。

**「窒息者のうた」（長嶺勝磨・沖縄県立芸術大学美術工芸学部美術学科）**

内面に疼いている感覚の風景を詩的な言葉で描いた作品といえる。「窒息者」の暗いイメージを堀りながら詩的空間を作っている。表現は直接的ではなく心理的・暗喩的になっている。第二、三連の流れから失恋やなにかの喪失感が主題かなと思わせる。そんな雰囲気の心理を言葉で展開して、自己表現に持って行こうとしている。

喪失感と再生の精神を、高く深く歌いあげようとしているし、内的なものの吐露からでてくる詩語の連結をみると、作者は詩が内的言語であることを知っている。受賞作と同じ水準にあると思ったが、現実感よりも内部感覚が先走っていて、輪郭の描き方が多重的すぎるので、表出の仕方を整理したほうがよかった。

**「虚実面境」（島袋歩・沖縄工業高等専門学校情報通信システム工学科）**

ひらがなとイメージを合体させ、日本語の語感（語音）を表出した叙景的な作品。言語感覚は淡々とした古典文語調。このひらがな文語調は作者好みなのだろう。言葉の韻律に気をつかっている書法がある。作品世界の流れで「のけもの」はキー語となっていて、この言葉と空間が交わりながら独特の空間描出をしている。文語の雰囲気。作者はそれを計算しているのだろう。口語が支配する時代に文語をあえて使っているのは雅文好きのせいだろう。

**「夏の色」（仲間陽香・沖縄工業高等専門学校メディア情報工学科）**

色彩を提示することで詩的情景を描こうとする書法がある。第二連に色の醸す風景が配置されているところに技巧的なものがある。夏の強烈な光と色と対比して「生きる」感覚をだしてくる言葉の運び方がいい。「生きろ」は自己暗示の言い方。作品の動的なアクセントになっている。色彩と生の出会い。平和の礎で戦争の死者の痛みを感じて、現在の生を急かされるのは作者が「何をすべきか」と問われているからであろう。

**「夜間非行」（清水元貴・琉球大学理工学研究科博士前期課程）**

散文詩である。はじめこういう書き方を詩作品として読むか迷った。が書いている内容が思惟と詩とのとつながりを徐々に出してきて、いつのまにか、詩的な文章として読んでいた。人間、認識、論理、自己という抽象に対する哲学的な問いを交えながら、思惟の言葉を記述している。その記述の方法が、卑近なものから高等な次元まで広がっている。情景を出さずに、知の世界で語っている。モノローグ＝内的対話のなかで自己と他者、言葉と表現、解釈、ずれ、詩への接近、といった問いに切り込んでいる。「夜間非行」は諧謔的な言い方。作者の感覚は観念の世界にあるので、形而上学的な書き方になっている。

（まつばら　としお／外部選考委員・山之口貘賞受賞詩人）

## 神を引きずり下ろす

宮城　隆尋

人間の動物性を徹底的に肯定することは、人間が神と同じような崇高な存在であるとのおごり高ぶった認識に対する強烈なアンチテーゼとなる。「アニマルテーゼ」（元澤一樹）はそこからさらに、創造主である神の動物性にまで視野が及んでいる。最終連、神のせりふであろう「考えたこともなかった」が白々しく響く。これこそが〈鈍感なふりして残酷さを隠す〉さまなのだろう。食欲や性欲を満たすことにとらわれているのが人間であり、それは崇高な存在などではなくただの異端動物である。同じ視点で神を問えば、神は人や世界を創造したかもしれないが、この世界や人間がろくでもないものであれば、神もやはりろくでもないものでしかないという情景が見えてくる。

虫や動物、人間、神を同一線上で見るといえば聞こえはいいが、この詩は人間や神を動物の範疇に引きずり下ろすパワーを持っている。命が等価値であることを描く作品で、小さな生き物の命に優しいまなざしを向けてそれらを人間と同一線上に引き上げるという手法があるが、この詩の場合、結論は近くても手法は正反対だ。人間はもちろん、神でさえ、食い食われる動物や虫と同じ存在であると言いたげだ。優しさの正反対のパワーは、結果としてそれらの優しい詩に対しても、その欺瞞生を暴くことになる。このパワーの基底には、神は人間が作り出した虚構でしかないという考えがあるのだろう。ものごとを上下で考える価値観に対しても、強烈なアンチテー

ゼになっている。世界とは何か、神とは何か、人間とは何か。読み手の価値観を揺さぶり、再考を促す力強さだ。

「夜間非行」（清水元貴）は自己（語り手）を突き放した視点にぶれがない。近代文学の担い手たちか、一昔前の文学青年による随筆のパロディーのようで、冒頭から大仰な物言いが滑稽だ。自己陶酔丸出しのHのせりふや、「オカハルオ」とつぶやく語り手のさまは笑える。語り手の葛藤は共感できるものであるが、さらに自己対象化された視点が表れてくるのは、言葉の刃を自身に向ける後半だ。そこで語り手が自身の句を示すところが秀逸だ。ただ自己対象化しただけなら語り手の内省を描く意味しか持たなかったかもしれないが、句の実践を示すことによって語り手が限界を読み手にさらす、至らなさを具体的に証明してみせるところが滑稽であり、かつ切ない。笑えるだけなら詩としての深みは出なかっただろう。滑稽なさまを実証を交えて痛々しいまでに描いたことで、詩行に切なさがにじみ、喜劇は悲劇性をまとう。読み手は自己を見つめ直すことを迫られる。

「虚実面境」（島袋歩）。〈のけもの〉は人の輪からのはぐれ者か。炎の盛るうちは淡い（アコークロー、三途の川）をさまよい、炎がおさまれば〈うつつ〉に戻る。森が言うには、求めること、食らうことは性（さが）であり咎（とが）である、定めであり咎めである。輪廻から逃れるには身代わるのみ。のけものは縁を継ぎ、請うてその身代わる。その淡いは昼と夜の、社会と孤独の、この世とあの世の淡いでもあるだろう。そして人と魔物の淡いでもあるかもしれない。ひらがなで統一した表記の面でも自覚的で、味わいのある作品。

「夏の色」（仲間陽香）。沖縄の夏は光が強く、影も濃い。その黒の濃さは、歴史の闇の深さも写している。鮮やかな色たちの背後に、どこまでも濃い影が張り付いていることに自覚的であろうとする姿勢に好感を抱く。

傷を負った旅人の跛行的な歩みを描いたような「窒息者のうた」（長嶺勝磨）。他者との、世界との距離を測りながら生き抜くことは、青年期を生きる者にとってまさに窒息を強いられる営為だろう。「ドリームマップ」（杉下薫）は〈とっぽっぽ　とっぽっぽ〉が何なのかわからないのがいい。独特の世界を確立している書き手なのだろう。

選外だが目にとまった作品に「朝」（霞千明）がある。お気に入りの毛布への思いを描いて、素朴だがすがすがしい。「カオス」（真栄里一青）は悲しみを受け入れるための涙が最終連、雨上がりの情景に重なる。大切な命を失ったが、その存在は生き続けるということに、百か日を前にして気づく。「輪廻転生」（島袋昴也）は人生の旅を描く。大切な存在も次々と過去になり、美しいものとして映る。ついには自分も過去になる。生きた証拠を残すことができるというのは希望だ。

今回、沖縄に向き合う姿勢が明確な作品も多くあった。しかしありきたりな語彙で沖縄賛美を重ねてもイメージは広がらないし、反戦運動への反発心を表明しただけでは偏狭に過ぎて日記にもならない。同様に新聞の見出しを組み合わせたような反戦テーマ詩も、言葉の力を殺してしまう。対象を深掘りする、または自己を対象化する視点がなければ、読み手にも書き手にも得られるものは少ない。その中で「南の島」（生田三四郎）は一定の距離を保って故郷を見つめていた。どうしようもなく嫌いだが、どうしようもなく離れられないのが故郷であるという、ひとつの真理

を描いている。素朴な語りも好印象だった。

（みやぎ　たかひろ／外部選考委員・山之口貘賞受賞詩人）

## 第十回琉球大学びぶりお文学賞　選考経過

第十回琉球大学びぶりお文学賞へは、平成二十八年五月二日から十月三十一日までの応募期間に、小説部門に十一編、詩部門に七十二編の応募がありました。

所属ごとの内訳は次のとおりです。

**【小説部門】**琉球大学＝六編（内訳　法文学部＝一編、理学部＝一編、工学部＝一編、農学部＝一編、人文社会科学研究科＝一編、理工学研究科＝一編）、沖縄大学＝二編、沖縄国際大学＝三編

**【詩部門】**琉球大学＝八編（内訳　法文学部＝二編、教育学部＝三編、理工学研究科＝三編）、沖縄国際大学＝五編、沖縄高等専門学校＝五十八編、沖縄県立芸術大学＝一編

また、学年ごとの内訳は次のとおりです。

**【小説部門】**三年次＝三編、四年次＝四編、大学院＝四編

**【詩部門】**一年次＝一編、二年次＝五編、三年次＝二編、四年次＝三編、大学院＝三編、高専四

年＝五十五編、高専五年＝三編。

小説部門は、応募数が十一編と少なかったため、附属図書館職員による一次選考を行わず、三名の選考委員（大城貞俊氏、西森和広氏、武藤清吾氏）による選考が行われました。また、詩部門は、七十二編と多数の応募がありましたが、こちらも附属図書館職員による一次選考は行わず、二名の選考委員（松原敏夫氏、宮城隆尋氏）による選考が行われました。

選考会議は、詩部門を十二月六日、小説部門を十二月七日に開催し、既発表のとおり、入選作を選出しました。これら入選作を含め応募作の選評については、前出の選考委員による選評をご覧ください。

平成十九年度に創設された本文学賞は、当初は、琉球大学の学生を対象にした小説部門のみでスタートしましたが、平成二十三年度第五回に詩部門を創設し、更に平成二十五年度第七回からは応募資格を沖縄県内の大学、短大、高専へと拡大し、今年度は第十回という節目を迎えることができました。記念すべき年に相応しく、今年度の入選者は、複数の大学や高等専門学校から比較的バランス良く出ており、県内の学生や関係者に本文学賞の意義・目的が浸透しているものと、大変喜ばしく思います。

本文学賞が、引き続き県内学生の文学活動の活性化を促進し、地域の文化活動のリーダーを輩出する一助となることを期待します。

（附属図書館職員）

# 第10回
# 琉球大学びぶりお文学賞

**募集締切：平成28年10月31日（月）必着**
**発表予定：平成28年12月上旬**

【小説部門】
受賞作1編 ＝ 海外旅行またはノート型パソコン（20万円以内）
佳作数編 ＝ 1編につき図書カード5万円分
※海外旅行を選択した受賞学生には、研修内容を「海外見聞記」として図書館報「びぶりお」で公表することを義務付ける。
【詩部門】
受賞作1編 ＝ 図書カード5万円分
佳作数編 ＝ 1編につき図書カード1万円分

【選考委員】
小説部門／大城貞俊（作家）、西森和広（法文学部教授）、武藤清吾（教育学部教授）
詩部門／松原敏夫（山之口貘賞受賞詩人）、宮城能尋（山之口貘賞受賞詩人）

【応募要領】
●ジャンルは小説・詩の2部門とする。
●未発表作品に限る。
●日本語で書かれた作品とする。
●応募資格
・沖縄県内の大学・大学院大学・短期大学・高等専門学校に在学する学部学生（高専の場合、本科4年次以上）及び大学院生とする。
・ただし、過去において受賞作となった作品の作者は、同一部門に応募することはできない。
●応募方法
・小説部門・詩部門ともに、A4判横長用紙にタテ書き、1枚につき30字×40行、11ポイントの文字で印字する。
・小説部門の応募原稿は、20枚以内とし、1人1編の応募とする。
・詩部門の応募原稿は、1編2枚以内とし、1人3編まで応募可能とする。
・小説部門と詩部門の重複応募を認める。
・必ず通し番号（ページ番号）を入れて右肩を綴じる。
・書き始めにタイトル、氏名を明記する。ペンネームも可。
・原稿の末尾に、住所、電話番号、メールアドレス、氏名（本名・ふりがな）、大学名・学部・学科（大学院の場合は研究科）、学年を付記する。
・ホームページの投稿用フォームをダウンロードして貼り付ける形でも構わない。
（個人情報は応募に関する連絡以外には使用しません）
・応募手段は、直接持参、郵送、Eメールでの送付（メール添付での応募の場合、PDF形式）とする。
・応募原稿は返却しない。
・入賞作品の著作権は、琉球大学に帰属するものとする。

●送付先および問い合わせ
〒903-0214 西原町字千原1番地 琉球大学附属図書館
情報サービス企画係 電話：098-895-8167 mail：kikaku@lib.u-ryukyu.ac.jp

びぶりお文学賞 検索

過去の受賞作品集や選評が読めます！

# 第十回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

発行日　二〇一七年三月十五日
編　集　琉球大学附属図書館
発　行　国立大学法人琉球大学
〒九〇三―〇二一四
沖縄県中頭郡西原町字千原一番地
印　刷　株式会社　近代美術

## 第 10 回 琉球大学 びぶりお文学賞

### 小説部門

受賞作

**赤いまま**
竹澤 さち（琉球大学）

佳作

**密輸事件簿…密輸犯を絞り込め**
沼田 健次郎（沖縄大学）

### 詩部門

受賞作

**アニマルテーゼ**
元澤 一樹（沖縄国際大学）

佳作

**夏の色**
仲間 陽香（沖縄工業高等専門学校）

**夜間非行**
清水 元貴（琉球大学）

**虚実面境**
島袋 歩（沖縄工業高等専門学校）

**ドリームマップ**
杉下 薫（琉球大学）

**窒息者のうた**
長嶺 勝磨（沖縄県立芸術大学）

## 第 10 回 琉球大学 びぶりお文学賞

### 小説部門

受賞作

**赤いまま**
竹澤 さち（琉球大学）

佳作

**密輸事件簿…密輸犯を絞り込め**
沼田 健次郎（沖縄大学）

### 詩部門

受賞作

**アニマルテーゼ**
元澤 一樹（沖縄国際大学）

佳作

**夏の色**
仲間 陽香（沖縄工業高等専門学校）

**夜間非行**
清水 元貴（琉球大学）

**虚実面境**
島袋 歩（沖縄工業高等専門学校）

**ドリームマップ**
杉下 薫（琉球大学）

**窒息者のうた**
長嶺 勝磨（沖縄県立芸術大学）